文化・芸術・思想——領域を横断する批評

العشية / VISPERAS / 전야 / L

季刊

前夜

第Ⅰ期

6号

2006年 冬

特集

第三世界という経験

特別座談会

映画『ルート181』傷のうえを歩む旅

ミシェル・クレイフィ／エイアル・シヴァン

白人どもの野蛮

ロザ＝アメリア・プリュメル

鵜飼哲

第三世界の長い夜

温鉄軍

グローバリゼーションと中国農村

フーベルト・ザウパー

アフリカのまなざし

ノーマ・フィールド

キューバを想う

来日特別座談会

傷のうえを歩む旅

――記憶・責任・言語・共生

ミシェル・クレイフィ
Michel KLEIFI
エイアル・シヴァン
Eyal SIVAN
鵜飼哲
UKAI Satoshi
徐京植
SUH Kyung-sik
訳　西山雄二

右から、
E・シヴァン、
森千香子（通訳）、
M・クレイフィ、
鵜飼哲、
徐京植

映画『ルート181』より
イスラエルが建設した分離壁

パレスチナ人ミシェル・クレイフィとユダヤ人エイアル・シヴァン、二人は共同監督で四時間半にわたる長編ドキュメンタリー『ルート181』を制作した。一九四七年の国連決議で採択された、いまは幻のパレスチナ分割線を「ルート181」と名付け、車で辿る旅。現イスラエル領の各地で出会う人々――多くは占領者の声に耳を傾ける、という作品だ。

いま観るべき映画として広く紹介したいと考えていた私たちのところへ、山形国際ドキュメンタリー映画祭二〇〇五（十月七～十三日）東京事務局より共同で両監督を招聘できないか、との打診があった。そして、十月十四～十六日、両監督を東京に招き、東京経済大学、東京日仏学院、東京演劇アンサンブルの協力を得て、トークを交えた上映会が実現したのである。当日はのべ六百人が集まり、入場できない人たちも数多くでた。二人の議論と思考の積み重ねがあってこその作品であり、闘いであることを思い知らされる数日間であった。なお、『ルート181』は山形映画祭で最優秀賞を受賞した。

ここでは、本誌主催の座談会とシンポジウムでの対話を紹介する。座談会は、両監督と鵜飼哲、徐京植が参加し、十四日に東京経済大学で行なった（通訳：森千香子・菊池恵介）。

なお、来日特別上映にあわせて刊行した季刊前夜別冊『ルート181』（一八二頁参照）を併読していただきたい。また、座談会を含む両監督の発言と『ルート181』について、NHKのETV特集で放映される（十二月二十四日予定）。

この十年

徐　クレイフィさん、シヴァンさん、ようこそいらっしゃいました。私とクレイフィさんとは十年前に日本で対談をしています。[*1] 季刊前夜別冊『ルート181』（以下、前夜別冊）にあるフィルモグラフィを見ますと、クレイフィさんは、九五年に『許されざる婚礼』という作品を撮ったあと、今回の作品を除いて十年間映画を作っていらっしゃいません。あなた個人にとって、また、パレスチナという場所にとって、この十年間はどのような十年間だったのでしょうか？

クレイフィ　みなさん、こんにちは。先日の山形国際ドキュメンタリー映画祭とは異なり、今日は東京経済大学での作品上映と座談会というアカデミックな枠組みで私たちを招待していただきました。たいへん感謝しています。みなさんと一緒に、『ルート181』をめぐるさまざまな問題を考えてみたいと思います。

この十年間、確かにいろいろなことが起こり、まるで人生の縮図のようでした。しかしどうでしょう、中東の長大な歴史からすれば、さほどたいしたことではなかったのかもしれません。たとえば、オスロ合意への署名、ラビン首相の暗殺、アラファトPLO議長のガザ地区への帰還といった出来事がありました。オスロ合意によってパレスチナ暫定自治が承認されたことで、パレスチナ暫定自治政府のさまざまな組織が「発足」しました。この「発足」という言葉に私は留保をつけたいと思いますが、しかし現実にそうした動きははじまっています。

イスラエルとパレスチナという二つの社会が共存することで矛盾が生まれています。一方で、パレスチナ社会はいまだに混乱していて、充分に日の目をみてはいません。他方で、私が思うに、イスラエル国家はきわめて単純なパラドックス、しかしながら、きわめて強力で深刻なパラドックスにとらわれています。つまり、二つの社会を認めるけれども両者のあいだには分離が必要だ、隔離の技術を探求しなければならない、というパラドックスです。分離状況を作り出さなければ、事実上、二民族国家状況が生まれ、程度の差があるにしろ二つの権力が生じてしまうからです。早急に分離状況を作り出す必要が出てきたわけです。

徐　十年前の対談のとき、私はペシミスティックであなたはオプティミスティックだという話をしましたが、憶えていらっしゃいますか？　十年たった現在も、あなたは同じようにオプティミスティックですか？

クレイフィ　私は一〇〇パーセント、オプティミストだったこともなければ、一〇〇パーセント、ペシミストだったこともありません。[*2] パレスチナの作家エミール・ハビービーが言うように、人間はつねにオプティミストとペシミストの混交状態にあるわけですから。前回お会いしたとき、私がオプティミスティックな傾向が強いとあなたには感じられたのでしょう。

しかし、いま、当時のことを思い出しながら率直に申し上げますと、さまざまな人の見解はさておき、私は最初からオスロ合意には反対でした。あの合意は間違いだと確信していました。そして同時に、私は個人の論理と集団の論理は同じものだろうか、と自問していました。個人にとっては不都合な場合でも集団の意識が形成されるのはなぜか、いかにして集団の利害関心の束を反映した形、すなわち、政治というものが生み出されるのか、と考えをめぐらせていたのです。オスロ合意には反対だと言いましたが、しかし、私はこれを否定するつもりはありません。あの合意は戦略的には二つの社会にとって重要な要

『ルート181』映画解説

早尾貴紀

シオニズム運動によって20世紀初頭よりユダヤ人の組織的入植が進められ、1947年11月29日、国連によるパレスチナ分割決議181が採択された。パレスチナの土地の56パーセントを当時人口比で三割に達していたユダヤ人に、43パーセントの土地を7割のパレスチナ人に与え、残りのエルサレム・ベツレヘムを含む地域を国際管理下に置くとされた。実際にはそれさえもがユダヤ人側に受け入れられることなく、当初から分割決議を無視する形で、ユダヤ人の側の武力による領土拡張（パレスチナの村の破壊と住民の虐殺・追放、そしてユダヤ人の入植政策）がその分割線を越えて進められた。その過程で約百万人のパレスチナ人が難民となり、16万人のみがイスラエル領となる地域に残り、イスラエル国籍のパレスチナ人となった。

2002年夏、パレスチナ人ミシェル・クレイフィとユダヤ人エイアル・シヴァンは、その分割線を「ルート181」と名づけ、その道を車で走りながらさまざまな人びとにインタビューしていく。

訪れる町や村はほとんどがヘブライ語で呼ばれているが、その地に隠された元のアラビア語の地名があること、あるいはユダヤ人の町のすぐ隣に忘れられつつあるアラビア語の名前の廃村があることが、各地で示される。監督たちは地元の人びとに、「元の地名は？」という問いを投げかける。そのことで、すべてのユダヤ人の町がパレスチナ人の村の上につくられた「入植地」であったことに気づかせられる。

監督はさらに人びとに問いかける。相手がユダヤ人の場合、「あなたの（ご両親の）出身は？」。そうすると、モロッコ、チュニジア、イラク、イエメン、ロシア、ドイツ、ハンガリーなどと返ってくる。「では、あなたがたの前にここに住んでいた人びとは？」。すると、「さあ？」、「いなかった」、「アラブ人らは逃げ出した」、「アラブ人らが土地を売って明け渡した」という答え（多くのユダヤ人は、パレスチナ人という名称を避けアラブ人という総称を使う）。「いや、追放や虐殺をしたのではないか？」と問うと、そこで本音が剝き出しになる。「我々が戦争で勝ったのだ！」と。追放され難民となった人びとについても、監督は質問をする。「パレスチナ人らとはいっしょに住めない？」。すると、多くのユダヤ人らが答えから逃げる。「昔は平和に暮らしていた」、「政治の話は私たち市民には触れられないこと」。

そこで次々と露呈されるのは、人びとの無知、二重基準、居直りだ。

それに対置されるパレスチナ人らの証言は、半世紀前の記憶を語るときにも、いま目の前の現実を語るときにも、きわめて生々しい。有無を言わさず虫けらのように家族が引き裂かれ、殺され、あるいは土地が強制的に没収され、家屋が破壊される。監督は、同じ一つの出来事についてのユダヤ人の側の見方をパレスチナ人の証言の前に置くことで、ユダヤ人の欺瞞を浮き彫りにするような工夫をしている。

素をもっていたからです。しかしともかく、私は疑念を抱くことによってこそ思考のダイナミズムが生まれてくるのだ、と考え続けています。

補足しておきますと、当時、私をペシミスティックにさせた要素として、映画制作をやめてしまったということがあります。オスロ合意の破綻はそれほど深刻な変化と危機を私にもたらしたのです。

徐　あなたは、九三年の鵜飼さんとのインタビュー[*3]で「被占領地で私は傷の間を航海している気持ちになりました。傷には二つの岸辺があるからです」というきわめて詩的な、印象的な表現を用いられました。私はこの言葉に惹かれて、あなたの作品を観るようになったのです。今回、シヴァンさんと二人で「ルート181」を旅したわけですが、この旅を喩えるなら、どのように表現されますか？

クレイフィ　戦争や紛争のような状況において、人間の肉体が負う傷はひとつだけではありません。古い傷のうえにさらに新しい傷が重なって、傷跡でさえ傷として残り続けます。この旅では、私たちはすでに治癒したようにみえるさまざまな根源的な傷のうえを歩みました。ですから、映画を撮影するとき、新たに開いた人々の傷口のなかに落ちてしまわないように慎重に進まなければなりませんでした。この映画がほとんどつぶやきにも似た声調（トーン）を帯びているのはそのためです。

共同で物事を考えることは可能か

徐　シヴァンさん、この映画を作った動機やクレイフィさんと仕事をするようになったきっかけなどをお聞かせください。

シヴァン　これが最初の発言ですので、私もまた、みなさんに、そして、たいへん素晴らしい仕事をされている雑誌『前夜』の方々にお礼を申し上げたいと思います。とりわけ心に残っている感動的なことは、遠く離れたとても小さな土地パレスチナをめぐって起こっている紛争が山形や東京でみなさんの関心を惹きつけ、さらには、この紛争を考察するようにうながしていることです。こうした感謝の表明のなかに、すでに私の答えが隠されています。ミシェルとの共同作業とは、私たちは共同で物事を考えることが可能なのか、それはいかにして可能なのか、という問いにほかなりませんでした。

徐　どちらから呼びかけたのですか？

シヴァン　芸術家や知識人の出会いというものは、恋人たちの出会いのように、どちらか一方が最初にキスをして関係がはじまるというものではなく、もっと奥が深いものです。私たちは二人とも映画の世界で生きてきたわけで、十五年来の知り合いです。あるとき、私たちは会話や議論を積み重ね、数多くの考察をめぐらせ、自分たちが直面しているイスラエル―パレスチナ社会の現状を確認し合ったのですが、その直後、何をなすべきかという問いが二人のなかに湧いてきました。ひとつだけ確実だったのは、映画を制作するということでした。機が熟して、私たちは一緒に行動しました。一方が発案して、他方が同意したというわけではなく、何をなすべきかという問いははじめから、二人でどのように闘うことができるのかという問いだったのです。映画という表現手段でもって政治的な闘争を仕掛けること、それは結果的に、二人で映画撮影の旅に出ることでした。

クレイフィ　私たちはまず、いかにして政治的な闘争ができるのかという問いを立てました。当初からこの映画の企画は政治的な具体性を帯びていたのです。

二人との出会いから

鵜飼　今回、私は山形国際ドキュメンタリー映画祭に初めて参加し、クレイフィさん、シヴァンさんのお二人と再会しましたが、いま感じていることは、早くもう一度『ルート181』を観たいということです。この映画は四時間三十分のバージョンで公開されていますが、七時間ヴァージョンのDVDも発売されています。それを観たくてしかたがありません。

鵜飼哲さん

シヴァン　日本でも七時間ヴァージョンのDVDをぜひ発売してください（笑）。四時間半の劇場公開版に加えて二時間半のボーナス映像が付いています。劇場公開版ではカットされた登場人物、もっと生々しい場面が追加されていますよ。

鵜飼　私は軽率にもすでにその可能性を考えています（笑）。

映画の個々のシーンについて触れる前に、私とお二人の関わりについて、お話ししておきたいと思います。

私は、ミシェル・クレイフィという映画監督の名前を知るより先に、『豊穣な記憶』という映画に出会いました。一九八七年の十一月二十九日、この日は国際的なパレスチナデーで、パリで反人種差別のデモがあり、そこに私は参加していました。そのデモの中にパレスチナ連帯を主張する団体がいました。アラブ系の移民女性たちのグループが「豊穣な記憶」と名乗っていたのです。そのとき知り合いになったシリア人の女性から「これはミシェル・クレイフィという監督の初作品の名です。まもなく彼のすばらしい新作が発表されるから、ぜひ観なさい」と言われました。それが『ガレリアの婚礼』です。その日からおよそ二週間後にパレスチナで第一次インティファーダがはじまりました。ですから私にとって、ミシェル・クレイフィという監督の名前、『豊穣な記憶』という映画タイトル、『ガレリアの婚礼』を観たパリの映画館、そして「石の革命」と言わ

れた第一次インティファーダの衝撃的な開始はひと続きの記憶になっていて、それ以降の自分の仕事のあり方、ものの見方や感じ方までを決定づけてしまったという気がします。

シヴァンさんについては、九〇年代に『スペシャリスト』というアイヒマン裁判を扱った映画の監督として初めて意識したのですが、実はそれよりも随分前に出会っていることに最近気がつきました。パリのポンピドゥ・センターで「シネマ・デュ・レエル（現実的なものの映画）」というドキュメンタリー映画祭が毎年開催されていますが、留学中の一九八七年に『山谷――やられたらやりかえせ』という山谷の労働運動を扱った映画――この映画の制作過程で二人の監督が暗殺されています――を出品したことがあります。その映画祭でグランプリを受賞したのがシヴァンさんの『アカバット・ジャベル――通過の生』でした。そのときシヴァンさんは弱冠二十歳でした。

そして、九二年に「豊穣な記憶――インティファーダ世代の音と映像」というタイトルで、『豊穣な記憶』、『マアルール村はその破壊を祝う』、『ガレリアの婚礼』、『石の賛美歌』の四作品の上映を日本で企画しました。そのときに私は、新しいタイプの第三世界の映画作家、新しい形で〈記憶〉というものを焦点にすえた映画作家としてミシェル・クレイフィという映画監督を再認識しました。それから私は〈記憶〉というものをさまざまな角度から考えるようになり、日本という社会において〈記憶〉がどのように歪められているのか、どのように生き延びているのかという問題を意識するようになりました。そのきっかけを与えてくれたのがクレイフィさんで、単なるパレスチナ人の映画監督というにとどまらず、私に普遍的かつ同時代的な視点を与えてくれた人です。

また、シヴァンさんは『イズコール――記憶の奴隷たち』という作品を撮っています。イスラエルのユダヤ人の子どもたちが小さい頃からどのようにして〈記憶〉をたたき込まれて育っていくかを捉えた、やはり〈記憶〉の映画です。二人が扱ってきた記憶の問題は、同時代の作業ですが、問題にしている記憶のあり方が違っているので、それぞれに異なったアプローチが見られます。そこで、お二人にお聞きしたいのですが、これまでそれぞれが〈記憶〉にかかわる作業を行なってきたのちに、『ルート181』では、その作業を個々にどのように継続させたのでしょうか？

記憶をめぐって

クレイフィ　記憶とは大地に根づいているものです。記憶は観念的なものではなくて、ひとつの具体的な現実なのです。映画を撮影すると、いたるところでこの事実を理解します。私たちのまわりで起こっていることに眼差しを向けると、とくに紛争や戦争が生じているときには、自分たちの意志に反して記憶は外に飛び出してきます。記憶とは現にここに存在しているものであって、大地の歴史の一部なのです。イデオロギーの記憶、家族の記憶、心理学の対象とされる記憶等々、たくさんの種類の記憶があります。しかし、なかでももっとも力強い記憶とは大地の記憶、つまり、慣れ親しんだ風景や過ごした歳月の痕跡であって、この種の記憶こそが人間の情熱や活動の源泉となるのです。

ミシェル・クレイフィさん

『豊穣な記憶』とは対称的な仕方で、エイアルは『イズコール――記憶の奴隷たち』という作品で、理性的／非理性的な記憶という主題に取り組みました。この作品で登場人物たちは自分の過去や思い出を語るのですが、しかしその背後では、人々を記憶の奴隷に仕立て上げるような仕掛けが効果的に作用しているのです。今回、私たちは目にみえない線である「ルート181」をたどりながら、人々の記憶を引き出すように、彼らの記憶がおのずと湧き出てくるようにしました。私たちは出会った人々に、過去と現在に関する質問を投げかけました。この地域の記憶の歴史について彼ら自身に知ってもらうようにしたのです。こう言ってよければ、八〇年代から取り組んできた記憶をめぐる仕事のおかげで、今回、私たちはこの国や人々についてうまく認識できたわけです。映画にしろ文学にしろ、芸術に関係するあらゆる試みにおいてなすべきことは、ただ、記憶の形を見い出して、これを練り上げることです。私たちの問いかけを担うためには、形は力強いものでなければなりません。私たちはそれほど明瞭な考えをもって旅に出たわけではないのですが、具体的な現実に直面することでさまざまな記憶の形が徐々に整えられていきました。

シヴァン　ミシェルが作品制作の試みに触れたので、私は記憶という概念に少し足を止めてみたいと思います。ミシェルが撮った『豊穣な記憶』、私の『イズコール――記憶の奴隷たち』を例とするならば、「豊穣な記憶」に「殺害的な記憶」、「犯罪的な記憶」というものを対置することができるでしょう。おわかりでしょうが、記憶とは単一なものではなく、複数的なものなのです。また、興味深いのは、記憶という概念が人文科学の領域で注目されはじめたのはずっと後になってからだということです。私たちはかつて、今日と同じようには記憶について語っていなかったのです。現在では、記憶という概念抜きに社会学や哲学、政治学を語ることなど想像もつかなくなっているのですけれども。

記憶と忘却は対立するという混同はあいかわらず根強いもの

です。記憶はほぼ間違いなく、忘却と対になって語られます。私たちが『ルート181』の旅を通じて行なったことは、「記憶の考古学」とでもいえる試みでした。私たちは残存するもの、記憶されたものと同時に、すでに消去されてしまったものの上を旅したのです。ですから、記憶と忘却だけでなく、消去と保存という二項対立のことも考えなければなりませんでした。『ルート181』で行なったことはひとつの実践行為、つまり、消去されたものや消去する行為に抗する闘い、何かを保存するための闘いなのです。

エイアル・シヴァンさん

パレスチナは徹底的に破壊されてしまったにもかかわらず、パレスチナ人たちは存在しているというきわめて逆説的な状況があります。ある意味において、パレスチナ人の記憶を保護する者とは加害者であるイスラエル人でもありえます。たとえば、かつてここに村があった、という記憶は加害者と被害者双方の記憶の一部をなすのです。私たちがはっきり言えること、体験を通じて確信するようになったことがひとつあります。それは、あるトラウマを別のトラウマに対立させることはできないし、そうしてはならないということです。これが私たちの見い出した重大な問いでした。つまり、いかにして二つのトラウマが共存できるのか、という問いです。

クレイフィ　ただし、両者のあいだには力関係がある……。

シヴァン　もちろん、そのとおりです。加害者と被害者のトラウマ、大地や風景に宿るトラウマ、男性と女性のトラウマ、ユダヤ人とアラブ人のトラウマ……無数の被害の記憶があります。

クレイフィ　加害者のトラウマ……？（笑）

シヴァン　もちろん、加害者のトラウマも。しかし、いかにしてこれらのトラウマが共存することができるのか。ベルギーのある歴史家の言葉を借りれば、「犠牲者の選抜競争（ゴングール）」から抜け出すことができるのか。ミシェルがよく口にする表現を用いるならば、どの犠牲者がもっとも上位にあるのかという犠牲者の世界チャンピオン決定戦から抜け出すことができるのか、ということが問われています。

複雑さを映画で表現する

鵜飼　具体的な映画の場面についてうかがいます。映画の冒頭に、工事現場で二人のアラブ人の青年が測量をしている場面【図1】が出てきます。同時に、クルド系・モロッコ系のユダヤ人の現場監督が出てきます。ここでのやりとりが、非常に印象的でした。他の場面のようなはっきりとわかる対立ではなくて、アラブ人青年の感情の中にも屈折があり、そういった屈折がいくつにも折り重なっている。ユダヤ人も階級的に裕福な層ではない、そういう存在として出会っている。そして、この場面でただ沈黙している中国人労働者の存在と、この中国人についてクルド系ユダヤ人の語る言葉。イスラエルという国家の重層性を表すとともに、この映画を東アジアへとつなげる一本の細い糸になっているような気がします。

図1

徐　あの青年たちはベドウィン[*4]ではなかったですか？

クレイフィ　たまたま、私はマルクスにおける反ユダヤ主義の告発に関する著作を読んでいる最中なのですが、それによるとすでに十九世紀の資料のなかに、パレスチナ住民をベドウィンとみなし、ベドウィンたちを文明化する必要がある、といった記述がみられるそうです。初期シオニズムの言説において、ベドウィンという表現には侮蔑的な意味が込められていました。私たちは確かにパレスチナ社会のなかで定住してきたのですが、ベドウィンと呼ばれてしまうと、パレスチナ人は村をもたない、らくだに乗って遊牧する民であるということになってしまいます。

シヴァン　しかし、パレスチナ人は遊牧民ではない。

クレイフィ　そう、事実はまったく違います。だって、私たちの先祖こそが長い年月のあいだ、ガリラヤ地方に定住し、ローマ帝国時代からのオリーヴの木を守り続けてきたのですから（笑）。パレスチナの農民によってあの地域の文明が守られてきたのです。

シヴァン　ご指摘された場面に関して少し補足します。あなたが「全体的な場面」という表現を使われたかどうかわかりませんが、さまざまな事象が描かれているこの場面では、ある複雑さが提示されています。この複雑さは編集作業の途中から私たちに明らかになってきました。この場面は映画に対する私たちの考え方のひとつを象徴化しています。それは、ありのままの人生の複雑さと同じような複雑さを映画で表現するという考え方です。イスラエル人の生活とパレスチナ人の生活といった明確な区別ではなく、こうした複雑さこそがこの場面を理解する

端緒となります。私から言わせれば、この複雑さを一部のメディアは、人々の思考を否応なく単純化する表層的な断絶や対立として描き出すでしょう。しかしそうではなくて、実際は、数多くの要素が渾然一体となっているのです――財政、階級、労働者、エスニシティの問題があり、イデオロギー的・宗教的に愚直な発言が飛び出し、人口移動の現状が示唆され、風景の美しさが映し出されるというように、さまざまな視覚的要素が多くのことを象徴しているのです。海岸の開発はどのように進められるのか、どのように公共の海岸・私有の海岸を整備するのか、といった要素さえ描き出されています。

この冒頭の場面が物語っているのは、これから私たちはきわめて複雑な手法によってこの映画を開始させるのだ、ということです。撮影する側からしてみれば、混乱するしかないほど手に負えない複雑さです。そこから考察に値する要素をいくつも引き出すことが重要なのであって、問題を単純化してはいけません。この手の単純化は、多くの場合、マニ教的な二項対立に陥ってしまうのですから。

クレイフィ　あの場面に登場する二人の現場監督について付言しておかねばなりません【図2】。彼らの存在がこの場面の刺激的な要素となっているからです。片方の現場監督はどっちつかずの態度で、「自分たちはモロッコ系のユダヤ人だ」などと語ります。しかし、もう片方の現場監督、つまり、明確なイデオロギーをもった乱暴な監督が口を開くと、彼はどうしても遠慮してしまいます。荒っぽい監督のほうは暴力的な言葉でもって、アラブ人を動物に喩えました。「同じ人間を『動物』呼ばわりするのか、かつてナチスもユダヤ人を動物に喩えて否定したのではないか」と問い質すと――この部分は編集過程で削除したのですが――、彼は「ナチスは間違っていたが自分たちは間違っていない」などと言い張る始末です（笑）。イデオロギーの愚昧さ、粗暴さがむき出しになるこの場面に、私はドキュメンタリーの魔術の精髄を確認することができます。剛直な現場監督と柔弱な監督とが的確な対位法をなしていて、気弱な監督の方は相手に合わせて語り方を一変させます。彼の態度が示しているのは、私たち人間の深層にほかなりません。誰もが厳格で一貫した態度をつねにとっているわけではなくて、私たちは他者との関係のなかで自己を変容させるのです。

図2

余談として付け加えたいのですが、この最初の場面では、私がインタビューをしていました。あの場面で「いいアラブ人とは死んだアラブ人だ」という嫌悪すべき発言が出てきますが、実際、アラブ人である私が彼の前にいたわけです。このとき、エイアルは激怒してしまって、「なぜあんな酷いことを言わせておくんだ、何か言い返せよ」と激昂していて、彼のほうがいまにも飛びかからんばかりに身構えていました。だから私はエイアルに、「私たちは裁くため、論争するために撮影に来たわけではない。ただ、トラウマの真実が明るみになるようにひたすら耳を傾ける必要がある」と答えました。何よりもまず、他者の語りを聞かなければならないのです。

シヴァン　興味深いことですが、私はこのように考えるようになりました。二人の現場監督の場合にしろ、二人の若いパレスチナ人の場合にしろ、確固たる思想やイデオロギーを確信犯的にひけらかす者がいる一方で、いまだ曖昧な態度で躊躇しながら発言する者がいますが、この映画全編を通じて多種多様な人間性が提示されています。イスラエル人／パレスチナ人、ユダヤ人／非ユダヤ人などといった明確な区別があるわけではないのです。まさにこうした現実そのものを、この映画は表現することに成功したのです。あらゆる苦痛や憎悪を引き出し、イデオロギーに裏打ちされた他者への嫌悪感を引き出すことによって、迷いや躊躇が人々をつなぐ架け橋の可能性となるかもしれません。

クレイフィ　さて、どうだろうね……。

シヴァン　いや、ともかく、検討すべき課題だとは思う。証言者が自らを曝け出すために取材されるのであって、私たちは彼らとの討論や議論に参入することはしませんでした。映画の最後でユダヤ人の退役軍人がアラブ人を暴力的に追放し、彼らの村落を破壊した「箒（マタテ）作戦」に従事したことを語りますが、あの場面などは象徴的でしょう。

クレイフィ　付け加えておくと、天然のダイアモンドのようなありのままの現実こそが私たちを魅了し、こう言ってよければ、私たちの道案内をしてくれました。私たちはさまざまな人々のありのままの人間性をその都度、即座に受け入れたのです。

アラビア語か、ヘブライ語か

徐京植さん

徐　あの場面で、非常に知的に見えるアラブ人の青年に、「アラビア語で言ってみて」と問いかけるのはクレイフィさんですか、それともシヴァンさんですか？また、あの問いかけには、どのような意図があったのでしょうか。

シヴァン　あの場面では、私たち

はまずはヘブライ語で話しはじめて、相手の立場や態度に応じて、次第にアラビア語に移行するようにしました。私たちは粗削りなやり方で撮影をして、撮影中に生じた言語の錯綜状況を編集によってできる限り復元しようと努めました。確実だったことは、アラビア語で話しかけるのか、ヘブライ語で話しかけるのかを議論するために、撮影を中断して考える時間をつくるという原則です。

たとえば、私が考古学者に語りかけ、ミシェルは傍らにいる労働者たちと語って様子をうかがったり、道路封鎖をするイスラエル兵士から離れた場所で議論したりして、どちらがインタビューをとるのかを決定しました。ヘブライ語とアラビア語のどちらで話すのか、あらかじめ決めておくという選択肢はありませんでした。私たちは何度も作業を中断しながら、何語を話せばよいのか、対話者との関係のなかで、その都度、発見していったのです。いずれにしても、私たちは非常にフレキシブルなやり方で撮影をしました。あらかじめプランを立てるということはせず、ミシェルが検問所の兵士に話を聞きたければ聞き、私のほうは遺跡の発掘現場へ行くというようなやり方です。いきあたりばったりで、自由に撮影しました。

徐　私は植民地主義と言語の関係に関心があるので、以前クレイフィさんと対談したときも、そのことにこだわってお話ししました。クレイフィさんは、母語であるアラビア語とイスラエルで教育を通じて身につけたヘブライ語ができるわけですが、シヴァンさんは、アラビア語がおできになるんですか？

シヴァン　私はアラビア語を話します。ただし、ミシェルが話すヘブライ語ほど上手なわけではありません。そして言い添えておかなければならないのは、ユダヤ人である私が話すアラビア語、アラブ人であるミシェルが話すヘブライ語は、この映画のインタビューにおいて同等の関係をもつわけではないということです。ユダヤ人である私がアラビア語でインタビューをするという可能性は、当然ながら、非常に限られていました。私はアラビア語を完全に習得しているわけではありませんし、占領者ユダヤ人にアラビア語で語りかけられるという関係のなかでは、相手の言葉を十分に引き出すことができないからです。これに対して、ミシェルはヘブライ語を話すとき、アラブ系ユダヤ人、あるいはフランス系ユダヤ人として振舞うことができます。

クレイフィ　近年、ヘブライ語が変化するにつれて、イスラエル社会では言語的な混乱状況が生じています。興味深いことですが、ヨーロッパから大勢のユダヤ人がやって来たことで、ヘブライ語は西欧化され、脱アラビア語化されてしまっているのです。そうしたイスラエル人の多くは伝統的なヘブライ文字を使用することがかなり困難であるために、ある程度西洋化された「セム系」の文字を使用しています。移民政策が加速する近

年、かなり急速に文字の混乱も進展したわけで、伝統的なヘブライ語を知る人間は、ヨーロッパ系ユダヤ人ではなくアラブ人であるという皮肉な結果が生じています。興味深いことですが、イスラエル人対話者が私がアラブ人だと気づいても、ヘブライ語のレベルでは支障がないので、「しかし、本当にアラブ人かい？」と驚かれる時さえあったのです（笑）。

とはいえ、やはり私は、外国語を話すときのように、アラビア語やフランス語を頭のなかでヘブライ語に翻訳しながら話します。ですから、相手がアラビア語から転用されたヘブライ語の言い回しに即座に気づくこともありました。撮影中、私たちはこうした言語的混乱状況においてどのように役割分担すべきかを直観的に理解するようになりました。一般的な原則として、対話者が私がアラブ人だと見抜いて、不信感を抱いた場合には、私は後ずさりして、シヴァンの背後に回るようにしました。反対に、対話者が私がアラブ人だと絶対に気づかない、私のヘブライ語に少しも疑問をもたないと確信した場合、私はインタビューを最後まで続けました。反対に、エイアルがアラビア語で話しかけることはわずかでした。インタビューにおいては、言語の複雑な問題を表面化させることなく、対話者と信頼関係を結ぶことが必要不可欠です。なぜなら、話者が自発的に言葉を紡ぎ出す、つまり、内省し熟考することなく自分のありのままの姿をさらけ出すようにしなければならないからです。撮影を通じて、私たちはまさに、自分たちの言語とインタビューとの関係を模索し続けた、というわけです。

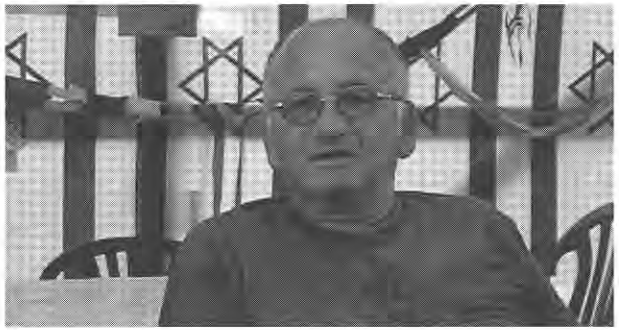


図3　「どうも君たちは怪しい」

悪の実在感

徐　先ほども少し出てきましたが、第三部の終わりのほうで、グリンバーグという退役軍人の老人――箒（マタテ）作戦を語った人ですね――がすべて正直に話し終わった後で、「どうも君たちは怪しい」と言います【図3】。彼は、クレイフィさんがアラブ人であることに気づかずに答えていたということですか？

クレイフィ　あの場面は、話者が私がアラブ人であると見抜いたまさに最良の例です。

あの退役軍人はガリラヤ地域で暮らしています。この地域で生まれ育った私はある印象を抱きました。そう、彼の顔つきは、

私が幼年時代に感じたイスラエル当局の典型的な姿を想起させたのです。そんなわけで、このインタビューの時、私ははじめから後ろに下がっていました。しかし、私が思わずある質問を投げかけたときに、彼はピンときたのです（笑）。

シヴァン　「なぜ自分の家に帰るのにヴィザが必要なのでしょうか?」という質問（笑）。

クレイフィ　彼は「彼らはアラブ諸国という自分たちの国に帰っただろう。いったいどこから帰るというのだ」と答えながら、お前の正体は見抜いたぞ、という雰囲気でしたよ（笑）。

シヴァン　あのインタビューにはかなり長い時間を費やしました。ですから、ミシェルの質問が突然、彼の不信感をあおったのではなく、他にもきっかけはありました。たとえば、私たちがあまりにも愚直に振舞って、「『箒作戦』とおっしゃいましたが、『箒』とは何ですか?」とばかな質問をしたときのことです。彼は苛立って、「『箒』ぐらいわかるだろう。あの『箒』だよ」と答えました。それと同時に、自分の前にこれほど無知な人間がいるのだろうか、自分は巧みに誘導尋問されているのではないか、と疑念を抱きはじめたのです。私が思うに、建国当初からイスラエルに住んでいるこの老人は、当然、アラブ人と対話することなど耐えられないでしょうが、しかしそれだけでなく、アラブ系ユダヤ人と対話することも難しいでしょう。ユダヤ人の間にもいろいろな階級が存在するからです。

クレイフィ　こんなふうに、イスラエルの現実を物語る見事な例が宝の山のように数多く存在するのです。どんなに小さな現実も貴重なのです。

鵜飼　山形映画祭のときから、あなたは「天然のダイアモンド」とおっしゃっていましたよね。

クレイフィ　そうです。

シヴァン　映画の編集作業を通じて私たちは、ありのままの現実という「天然のダイアモンド」を整形し磨きあげたのです。

徐　登場人物の一人一人が、悪の実在感をもって心の奥底を表出する、これは東アジアではなかなか難しいことでしょう。私はあたかもシェイクスピアの劇中人物たちの台詞のような感じすら受けました。マクベスとかね（笑）。しかし、一般のイスラエルの日常のなかで、クレイフィさんの言う「天然のダイヤモンド」が見えるのでなくて、あなたがた二人が、いまおっしゃったような、さまざまな工夫や仕掛けをしたから見えてきたと考えていいんでしょうか?

クレイフィ　工夫や仕掛けというよりも、私たちはただ、あらかじめ何の計画も立てずに、現場に行って撮影をしただけです。あなたの質問を聞きながら、さらに別の場面のことを思い出しました。エチオピアからの新移民[*5]たちがロッド統合センターで迎え入れの儀礼に参加している場面です。あのとき、私たちは撮影の間中、一言も質問を発しませんでした。本当なんですよ。この儀礼に出くわしたとたん、私たちは人々の沈黙に唖然とし、魅惑されてしまったからです【図4】。興味深いことをたくさん語ってくれた若いエチオピア人がいたのですが、劇場版では彼らの沈黙を強調するためにカットしました（七時間版DVDには収録されています）。繰り返しますが、人間のなまの現実と出会ったとき、無意識的にどんな言葉も無用になって、ただ現実をきちんと見据えねばならないことがあるのです。

【図4】

シヴァン　まず第一に、徐さんは東アジアの状況と比較されていましたが、しかし逆に言えば、イスラエル社会ほど、いわば皮膚の表面で神経が剝き出しになった社会はないということでしょう。人々の神経が生々しく剝き出しになっているのです。

クレイフィ　傷を負っているようなものです、すこし擦っただけで傷口がなまなましく開いて、血が噴き出してしまう……。

シヴァン　危機的状況と隣り合わせのイスラエル社会ではすぐに傷が開いてしまうのです。

また第二に、私は山形映画祭のときに、ドキュメンタリー映画撮影に取り組んでいる女子学生と話しました。彼女は「満州」などで侵略戦争に参加した旧日本兵の証言を集めて、映画作品を制作しているのですが、私に、どのようにインタビューをすればよいのか、つまり、どうすれば対話者がこれほど語ってくれるのか、と質問しました。思うに、インタビューをするときに、ひとつ重要なことがあります。旧日本兵だけでなく、インタビュー取材を受けるすべての人々に共通の傾向だと思うのですが、カメラを向けられると、証言者はコメントを付け加えながら、知的に振る舞おうとします。自分たちはこれだけ知っているのだということをひけらかしたがるのです。ですから、取材者は、自分たちも事情を知っているという態度をとってはいけません。余計なことはせずに、ひたすら撮影していればいいのです（笑）。そうしないと、証言者が語る必要がなくなってしまって、彼らのインタビューへの気持ちが萎えてしまいます。証言者のおかれた立場や状況を先取りすることなく、取材者はなるべく単純な質問を投げかける必要があります。コメントを付け加えたり、返答を予測したりするのではなく、あ

くまでも好奇心に駆られているという姿勢を伝えることが重要なのです。こちらの旺盛な好奇心を示すことが、意地の悪い人間にも心優しい人間にも、どんなタイプの証言者にも有効な方法ではないでしょうか。

クレイフィ　確かに、「旺盛な好奇心を示すこと」は重要です。『ガレリアの婚礼』を撮影したとき以来、私がいわば座右の銘にしているドゥルーズの言葉があります。「狡知の運命は、たいへん博識だがじつはナイーブな相手から、あまりにもナイーブな人間として見られることである」（Le destin de la ruse, c'est d'apparaître trop naïf à des naïfs trop savants）という言葉です。たとえば、あの退役軍人はシオニズムの理想に完全に自己同一化しているわけです。取材者の役目とは自分が事情に通じていることを示すことではありません。自分の主題さえ的確に認識していればよいのです。ナイーブになることで初めて、いかにして証言者を導くのか、証言者からいかにして必要な言葉や情報を引き出すのかがわかってきます。

責任の問題

徐　さて、次に通訳として参加している菊池さんからひとこと発言していただき、それから、「共生」の可能性という問題について、現在の日本社会、パレスチナの状況を考えてみたいと思います

菊池　『ルート181』のヨーロッパでの受容の問題にふれたいと思います。この作品が出たときに、さまざまな反発があったと伺っています。二〇〇四年三月、パリのポンピドゥ・センターで行なわれた「シネマ・デュ・レエル（現実的なものの映画）」ドキュメンタリー映画祭では、この作品のボイコットを求めるキャンペーンが起こり、予定されていた上映の一部が中止されるという騒動がありました。[*6] こうした攻撃は、今回のシヴァンさんとクレイフィさんの作品に限らず、あらゆるイスラエル批判の声に対してなされています。その際に乱発されているのが「反ユダヤ主義」のレッテルです。「イスラエル国家はホロコーストの被害者の避難所にほかならず、これを批判するのは反ユダヤ主義だ」とする論法ですね。これは「反シオニズム」と「反ユダヤ主義」を意図的に混同させるレトリックです。しかし、「反ユダヤ主義」という言葉がヨーロッパでもつ歴史的な重みゆえに、とても大きな威嚇効果を発揮している。こうしたメディア上の攻防は日本という場所からはなかなか見えにくいのではないかと思います。

私自身は、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害の歴史に対して、戦時中の日本軍の加害行為との関連から関心を寄せてきました。ですから、ホロコーストの記憶は私にとってもどこか絶対的なものであって、その政治的利用を口にするのは憚られるものがありました。まして日本はナチス・ドイツの同盟国だったわけですから、なおさらです。ホロコーストの記憶の問題がいまのヨーロッパの文脈で帯びている政治性を自覚するようになったのは留学してからです。

私は、フランス滞在中、『ナヌムの家』という映画の上映活動に関わる機会がありました。これはパリで出会った数人の仲間で始めた小さな上映運動でしたが、私たちの活動を好意的に見守ってくれた友人には、フランス在住のユダヤ人ディアスポラの方が多かった。おそらく歴史修正主義との闘いという点で、シンパシーを抱いてくれたからなのでしょう。しかし、この点では一致できるものの、話がパレスチナ問題に及ぶと一転して会話がぎこちなくなることがよくありました。たとえば二〇〇一年のダーバン会議で、シオニズムは人種隔離政策だという非難がアラブ諸国から出たとき、彼らの反応は敵意に燃えるものでした。また第二次インティファーダが始まってから、フランスの世論においてイスラエルの批判が高まると、その際、彼らの多くはユダヤ人としてイスラエル擁護の立場に結束していった。なぜ祖父母の苦難の経験に対して熱いコンパッションを抱く彼らが、イスラエルのパレスチナ占領政策に対してここまで防衛的になってしまうのか。これは、加害の記憶と被害の記憶の折り合い難さをめぐる普遍的な問題として、少し考えてみる必要があるのではないかと思うようになりました。

こうした状況のなかで、シヴァンさんは一貫してイスラエルの占領政策や建国神話を批判してこられました。このため、しばしば「反ユダヤ的ユダヤ人」として、いわば「非国民」呼ばわりされるなど、さまざまな嫌がらせを受けてきたと伺っています。昨年は銃弾を送りつけられるという騒ぎまでありました。「ユダヤ人として、あるいはユダヤ人だからこそ、イスラエルのパレスチナ占領を批判する」。これはいまの緊迫した文脈で、とても勇気のいることですが、決して自明な選択ではありません。そこで、どうしてこのような選択にあなたが至ったのか。この点を伺いたいと思います。

シヴァン　なぜ、私があるとき、自分が生まれ育った社会との断絶を選択したのかという質問に答えることはたいへん難しいことです。シオニストも含めて、ユダヤ人のヒューマニストや進歩主義者の事例をとりあげてみましょう。彼らは世界各地の危機的状況、たとえば、「従軍慰安婦」の問題、カンボジア難民のタイへの帰還権、ボスニアやチェチェンの紛争などに関心を示すのですが、ひとたびイスラエル―パレスチナ問題のことになると、彼らのヒューマニズムやインターナショナリズムは、ナショナリズムに豹変するとまでは言いませんが、しばしば、曖昧になり反動的になります。なぜ、どのようにして彼らの態度が変化してしまうのか、わずかな時間で説明するのは困難です。しかし、私自身のことを証言するならば、結局のところ、責任の問題こそが私にはきわめて重要です。いま、若い日

本人、ヒューマニストで知性のある日本人は朝鮮人を前にしてどのような態度をとるべきでしょうか。責任というものに裏打ちされた交流がなければ、否定的な空間が口を開けてしまいます。この空間こそが政治的なもの、すなわち、複雑さをともなう共同の世界を構築する試みを要求するのです。

端的に言うならば、責任をとるという原則が重要なのです。「あなたはパレスチナ支持者ですか、反イスラエル主義者ですか」という素朴な質問をされたら、私は「ちがう」と答えます。私はただ、イスラエルによる占領と不正に反対なのです。私の考えは単純な計算にもとづくものです。占領と不正に抗して戦っているのはパレスチナ人たちだから、私は彼らを支持する、というわけです。

別の方法をお教えしましょう。サッカーにはまったく興味はないのですが、サッカーの試合について、「どちらのチームを応援する?」と聞かれると、私は「どちらの方が弱いのか?」と質問します。そして、「ベルギー・チームの方が弱い」と言われれば、私はベルギーを応援することにしています。

さて、あなたが言及されたヨーロッパの現状に関してですが、イスラエル批判に対して、確かに強大な圧力がかけられています。それには二つの重要な要素があると思います。

まず第一に、長い間、イスラエル国家と世界中のシオニスト組織はある混同を活用してきました。それはシオニスト、イスラエル人、ユダヤ人という三つの観念の混同です。時が経って、三つの観念は今日、多くの人々の頭のなかで現実的に混合物となったのです。反ユダヤ主義の言葉でイスラエル国家を批判する者がいれば、反イスラエルの表現でユダヤ人を批判する者もいます。この混同は近年、イスラエル国家を支持するための道具となっています。いわゆる「ホロコースト」の道具化という表現がありますが、私からすれば、こうした混同は記憶の政治的利用にほかなりません。

また第二に、批判の批判という要素です。一九六七年の第三次中東戦争から現在の第二次インティファーダまで占領は約四十年続いているわけですが、イスラエル国家の政策は、擁護したいと思う者にとってさえ、もはや擁護しえないものになっています。イスラエル擁護の言葉がみつからないとき、擁護しえないものを擁護するためにもっとも効果的なやり方は議論そのものを禁じることです。議論を禁止して、社会的な論争が起こるのを妨害するのです。ポンピドゥ・センターでのたった一回か二回の『ルート181』の上映を反ユダヤ主義のかどで禁止したり、私に郵便で銃弾を送りつけたりするのは、議論をさせないようにするためです。しかし、私たちに議論させないというやり方こそが、政治的ビジョンの完全な破綻を物語っていると言うべきでしょう。

「共生」の可能性とは?

徐 この映画を貫いている、キーコンセプトの一つは、「共生」だと思います。たとえばこの映画では「どうすればいい、共生ってなんだ?」という、ユダヤ系イスラエル人が登場します。あるいは、「共生」という団体名をもつ市民運動が出てきます。この旅は、あなた方二人が自分たちの間の「共生」の可能性を探す旅でもあるのだと私は受け取りました。その「共生」を可能にする基準は、いまシヴァンさんが言われた、占領と不正に反対するという共通項だと思います。しかし、あなた方二人の間にある微妙な差異というものも、今日のこの短い話のなかにも、二度ほど浮かび上がってきました。

クレイフィさんが前夜別冊に寄せられた文章では、自分は植民地支配された側の人間であり、シヴァンさんは、支配する側の人間であるということを常に意識してきた、と念を押しておられます。

シヴァンさんは、「この映画には「イスラエル人の視点」と「パレスチナ人の視点」という区別はありません。われわれはまず映画監督であり、つぎにイスラエル人とパレスチナ人なのです」と書かれています。このことは共生の可能性を、もちろん探し求めているのだけれども、そこに至る道筋の困難さ、おたがいの立っている場所の微妙な差異ということを、私たちに想像させます。

そこで、この映画を撮るという仕事、あるいは、それを公開するという仕事を通して、いま二人の間で、このパレスチナという場所をめぐる、占領者と被占領者、植民者と被植民者の共生について、どのようなビジョン、展望が共有されているのかを聞きたいと思います。

シヴァン つねに言っていることですが、この映画は私たちのひとつの行為であって、契約や結婚といったものではありません。

映画の登場人物たち、とりわけアラブ諸国出身のユダヤ人の多くはあの頃はよかったと語ります。かつて自分たちはアラブ人やユダヤ人の隣人とともに快適に暮らしていた、何の問題もなく生活していた、たがいに共生していたと証言します。ユダヤ人とアラブ人が共生していた時代が確かにあったのです。正当で寛容な生活の記憶、責任感ある市民の姿がこの映画のなかで克明に描かれています。私たちはショックを受けるのですが、イスラエル人やイスラエル支持者たちはしばしば、そうした証言のなかに敵意しか見い出さないのです。私たちは歴史を参照しながら、ユダヤ人とパレスチナ人の間に開かれた空間を提示しているのですが……。

クレイフィ 確かに私は、前夜別冊に寄せた文章のなかで、自分が植民地支配された社会の人間、エイアルは植民地支配を行

なう社会の人間であると書きました。作業を上手く進展させるためには、たがいにどんな視点から、どんな立場で語るのかを理解することが大切です。シオニストには植民地支配する側／される側という視点が欠如しており、両者が混同されます。しかし現実には、パレスチナ人が無力である一方、イスラエル人は世界でも有数の力のある国家をもっています。サッカーの世界ランキングの比喩で言えば、かなり下位のチームとかなり上位のチームの関係だと言えるでしょう。にもかかわらず、イスラエル人たちは常に、不正な占領の犠牲者であるパレスチナ人と「同じ」立場を要求するのです。

簡潔に言いますと、私たちが着手した作業の重要性はある種のエネルギーを解放する点にあります。それは、イスラエル―パレスチナの問題を解くために必要なエネルギーというだけでなく、おそらく、観客のみなさんにも必要なエネルギーです。

直接には意識しにくいことですが、イスラエル社会は「戦争機械（マシーン）」という性格を帯びているようにみえます。イスラエル社会は植民者の社会であって、イスラエル人たちは戦争の視点で世界を見ます。つまり、彼らは空間を征服すべきものとみなすのです。地政学的な空間、知的な空間、商業的な空間等々、ありとあらゆる空間が領有されるべきものなのです。征服を企てる彼らの現実に対する視点は、過剰なまでに冷徹で合理的です。たとえば、映画では、エイアルが考古学者に「誰が盗む者で、誰が盗まれる者でしょうか?」と質問したとき、彼は「俺たちが国を盗んだ? それがどうした?」と、なんの後ろめたさもなく答えました。

さらに重要なことに、イスラエル社会は戦争機械のようなものにとどまりません。それはまるで、自らコンセプトを発案し、シナリオを準備し、資金を集め、配役を整え、それぞれの役者がしかるべき役を熱演し、観衆を惹きつけるという気狂いじみた映画超大作のようなのです。ですから、普通の映画作品と同じく、当然ながら、宣伝を行なうことが大切です。今や効力をなくしつつある彼らの映画作品「イスラエル国家」は、「あなたは反ユダヤ主義者だ」という批判をくり返すことで、逆に活性化されるのです。批判者の口封じをするため、彼らは躍起になって、自分たちに害のある映画館を閉鎖するのです。

イスラエル社会は誰かを威嚇することを望みます。私は三、四歳の頃から現在まで、イスラエル社会による数々の威嚇のなかで育ってきましたので、威嚇が日常茶飯事であることを知っています。それは、誰が自分の敵なのか、誰が共生できない人間なのかをつねに選別し、威圧するような社会なのです。イスラエル社会は戦争機械のような社会であって、彼らが自己宣伝する民主的で人道的な社会などではありません。だからこそ、私たちは、不条理な威嚇に対して恐れてはいけないと主張するために、この作品でエネルギーを解放しようとしたのです。

「ガザ撤退」は解放ではない

徐 いまクレイフィさんがおっしゃったことは、この座談会の結びにふさわしいお話だったと思います。つまり、戦争のビジョンで物事を見るような見方が世界化し、普遍化している。それは、日本社会に生きている人間にとっても無縁ではないという、ご指摘だったと思います。そのことを受けて、この映画が作られて以降の、この二年間くらいの間に、パレスチナで起きていること、とくに、ガザ撤退という出来事は、日本社会ではあたかも和平へ向けての一歩なのだというふうに誤解している人たちもいますが、そういうパレスチナの現状を踏まえて、最後に、一言ずつお二人からお聞きしたいと思います。

シヴァン ミシェルの返答につなげる形で、あなたの最後の質問に答えたいと思います。ここ二年間でさまざまな変化があり、ガザ地区からの撤退という新局面を迎えているわけですが、それは占領政策の再編にすぎません。脱植民地化が開始されたわけではないのです。イスラエル社会の脱植民地化でも、パレスチナ領土の脱植民地化でもなく、政策の再編が開始されただけなのです。ガザ地区のユダヤ人入植者たちを保護し、ガザ沿岸地帯を警備するのはあまりにも複雑で困難です。ガザ地区を包囲しこれを監獄化することで時間を稼ぎ、その間にヨルダン川西岸地域への植民を進めるほうが簡単なのです。こうした変化は、いかにして共生するのかという重要課題を後退させてしまっていて、将来の共生を推進するわけではありません。イスラエル人とパレスチナ人はこれまで悪い仕方で共生してきました。両者がよりよく共生していくのか、が問われなくてはなりません。

今日、イスラエル国家は占領政策を分離や隔離の政策へと転換しています。二つの社会を分離することが重要視されるようになりました。今日のガザ地区からの引き揚げは、撤退でも解放でもなく、分離することです。また明日展開されようとしている「飛び地」化計画も、一種の隔離政策です。それゆえ問題は、この分離政策に対してどのように闘うのか、ということになります。統合の言説や政策によってではなく、意見の相違を認めながら、分離ではなく共生という目的を目指して討論を継続することが重要です。

ミシェルが語ったイスラエルの「戦争機械（マシーン）」の特質を私も非常に危惧しますが、しかし、空間を征服し続けるイスラエルとは別の姿があると思います。それは西洋やエリート産業社会がつくりだしたある種の観念の実験場としてのイスラエルです。分離壁、貧富の隔離、移民に対する態度が実験され、最近では「テロとの戦い」という洗練された表現のうちに結晶した観念が実験されています。イスラエル国家は西洋の実験場とみなすことができますが、さらに、分離壁という新局面が開始さ

れています。私たちはまさに危機的状況にあります。今日、分離政策に対して何らかの対案を提示しなければなりません。こうした対案はたんなる夢ではなく、共同の作業を通じてのみ、具体化され明瞭になるのです。

クレイフィ　私が気にかけているのは、ヨルダン川西岸のいくつもの地域でパレスチナ住民たちが現実に被っている惨苦です。深刻で惨憺たる状況が続いているのです。とりわけベツレヘムでは何か救いの手が必要で、私は絶望しつつも黙ってはいられません。イスラエル政府の意志によって、また、世界中の無関心な態度のせいでこうした事態が進展しているのです。私はベルギーに移住する機会に恵まれましたが、多数のパレスチナ人はなおも千辛万苦をなめています。私は一九七七、七八年からベツレヘムで映画を撮影してきたのですが、人々の堪えがたい痛苦を感じざるを得ません。人々は真綿で首を絞められるように死につつあるとさえ思うのです。

私は陰謀説で情勢を把握することを好まないので、イスラエル社会は一種の制作物の社会だと表現するようにしています。それはくだらない、ばかげた映画作品のような社会です。愚昧なプロデューサーが質の悪い映画を制作したばかりに、ダイオキシンまみれの牛肉を売るように、愚劣な商品を売るために宣伝活動が必要となる。私にとって、近代社会イスラエルは映画作品のような社会なのです。そこでは、自然環境や人間の自然を考慮しない資本主義のシニシズムが蔓延しています。しかし、本来、人間の自然は解放され、自由でなければなりません。自由を希求するのが、人間の自然であり本性なのです。しかし、自由になるためには、イスラエル社会に手を差し伸べる以外にありません。否応なしにです。さもなければ、何一つできないのですから。ここにジレンマがあり、わたしたちの闘争の必然性があります。

鵜飼　このパレスチナをめぐる映画が、日本で公開され、幸いいま日（十月十四日）も、二百人をこえる方たちが観に来てくださった。この機会に、どうしても強調しておかなくてはならないことがあります。現在のパレスチナで起きていることは、二〇〇一年九月十一日以降の状況で、アフガニスタンでの、あるいは、イラクでの戦争とつながっているということ、しかもイスラエルの最大の同盟国である米国の戦争政策の一部として展開されているということであり、その米国のイラク戦争に日本は協力しているということです。

いま、最後にミシェルが語ったシニシズムは、われわれ自身が日々直面している、それと闘わなければならないシニシズムとまったく同じ質のものであると思います。その意味で、二人の仕事――私はいくつかの場所で、現在の、私たちの同時代における文化的抵抗の最前線の仕事であるという言い方をしていますが――から学んで、私たち自身のエネルギーを解放していかなければならないと思っています。

徐　ただ最初に、十年前のクレイフィさんは楽観的で、私は悲観的であったと申しましたけれども、実はそのときの対談であなたは、創造に携わるものは、人々が楽観的であるときは悲観的でなければならず、人々が悲観的なときは楽観的でなければならない、ということをおっしゃっています。これは、サイードがグラムシの言葉を引いて述べている楽観主義と通じるものだと思います。そうした高いレベルでの楽観性というものを維持しながら、先ほど鵜飼さんが言われた、最前線で闘っておられるということに、私自身、深い感銘を受けるとともに、日本はもちろん、韓国を含む東アジアで、このレベルの仕事が、私たちに求められているのだということをあらためて痛感しました。

山形映画祭では最優秀賞をとられたそうで、そのことにお祝いを申し上げて、今日の座談会を終らせていただきたいと思います。受賞おめでとうございました。

註

＊1　「普遍主義というひき臼にひかれて」『前夜別冊　ルート181』六四頁以下（初出『世界』一九九六年一月号　岩波書店）

＊2　エミール・ハビービー（Emile Habibi　一九二一～九六）イスラエルのアラブ人を代表する作家・政治家。ハイファのプロテスタントの家に生まれ、一九四〇年代から共産党の指導者として活動を行なう。第一次中東戦争以後もハイファにとどまり、五三年にはイスラエル立法府クネセトで共産党の議員に選出され、アラビア語の新聞『ユニオン』の編集主幹も務める。六〇年代から短編小説を発表し始め、七二年に執筆した第一作『悲観的楽観主義者サイード・アブー・ナフスの失踪に関する奇妙な出来事』は近代アラブ文学の傑作として現在までに十六ヵ国語に翻訳されている。九〇年にPLOの文学賞を受賞した

●ミシェル・クレイフィ
1950年、パレスチナの北、ガリラヤ地方のナザレ（現イスラエル領）で生まれる。14歳で自動車修理工となり、1971年ブリュッセルに渡り、INSAS（INSTITUT NATIONAL SUPERIEUR DES ARTS DU SPECTACLE ET METIERS DE DIFFUSION 国立高等舞台芸術学院）で演劇を学ぶ。ドキュメンタリー映画や劇映画を数多く制作、監督し、国際映画祭での評価も高い。80年に『豊穣な記憶』で監督デビュー。87年に制作した『ガレリアの婚礼』がカンヌ映画祭で批評家賞、サンセバスチアン映画祭でグランプリを受賞。現在、ブリュッセルに在住し、INSAS で教えている。

●エイアル・シヴァン
1964年、イスラエル北部のハイファ（現イスラエル領）に生まれ、エルサレムで育つ。82年レバノン戦争参戦を忌避して兵役を逃れ、85年渡仏。数多くのドキュメンタリーを制作、監督し、世界的な国際映画祭で受賞作品も多数ある。強制移動させられたパレスチナ人たちを描いた監督初作品『アカバット・ジャベル　通過の生 Aqabat Jaber, vie de passage』は、ポンピドゥーセンターで行なわれたシネマ・ドゥ・レエル映画祭で審査員大賞を受賞。アイヒマン裁判を独自の視点で読み直した『スペシャリスト：自覚なき殺戮者』など、出版、講演、映像制作を通じて、イスラエルによる記憶の政治的利用や市民の不服従、虐殺の道具化とその表象といった問題に関心を見せるようになっていく。93年ローマのヴィラ・メディシスに1年間招かれる。

●鵜飼哲
1955年東京生まれ。フランス文学・思想。ポスト植民地文化論。

●徐京植
1951年京都生まれ。作家。東京経済大学教員。

二年後、イスラエルのアラブ人として初めて「イスラエル賞」を受賞して波紋を呼んだ。

＊3　「パレスチナのイマージュと『世界記憶』の生成」『前夜別冊　ルート181』五四頁以下（初出『現代思想』一九九三年三月号　青土社）

＊4　ベドウィン　南部ネゲヴ砂漠地方と北部ティベリア湖地方に住む、半遊牧生活をしていたアラブ・パレスチナ人ムスリム。現在はイスラエルの定住化を促す管理統制によりほとんどが町に住むが、差別的政策のためにインフラ整備が阻害され、生活環境は劣悪である。また、建国期からベドウィンは、言語や地理に精通していることを利用され、国境警備などの歩兵部隊として動員されてきたが、現在でも社会的差別や偏見から逃れ社会進出をするための手段として多くがイスラエル軍の兵役に就いている。（前夜別冊解説より）

＊5　エチオピア新移民　古代ユダヤ教文化を保つ改宗クリスチャンで「ファラシャ」と呼ばれる。エチオピア飢饉のときなど、八四年と九一年に大規模な空輸作戦がイスラエルによってなされ、数万人が政策的にイスラエルへ移住させられた。厳密には「ユダヤ教徒」とは言えず、移民受け入れ自体に疑問を呈する声は宗教関係者の中につねにある。しかし、一人でも「ユダヤ人」を増やしたい政治的意図によって、現在でも毎年国会でエチオピアからの移民を受け入れる枠を議論している。だが他方、イスラエル社会の中に厳然とした差別や偏見があり、国民統合という観点からは深刻な摩擦を引き起こしている。（前夜別冊解説より）

＊6　「封印されるイスラエル批判――『ルート181』の上映中止騒動をめぐって」『前夜別冊　ルート181』三八頁以下

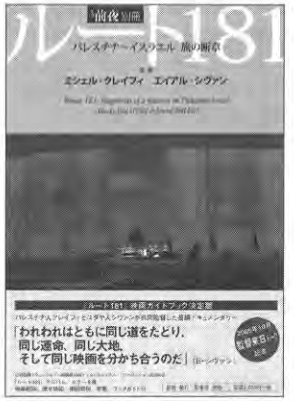
※撮影（一五七、一六三、一六六、一六九頁）　後藤由耶

季刊前夜別冊 ルート181 パレスチナ～イスラエル 旅の断章
映画ガイドブック決定版

ミシェル・クレイフィ
他者の声に耳を傾ける
エイアル・シヴァン
抑圧の記録

NHK ETV 特集
放映
2005.12.24

●パレスチナと私たち――『ルート181』に寄せて●
板垣雄三　岡真理　鵜飼哲
徐京植　高橋哲哉　清末愛砂
奈良本英佑　鄭栄桓　土井敏邦　古居みずえ
早尾貴紀　綿井健陽　中村一成
コリン・コバヤシ　広河隆一　臼杵陽　山上徹二郎
ジャン・ユンカーマン　佐藤真
★フランスでの上映中止騒動をめぐって　菊池恵介
［再録］M・クレイフィ、E・シヴァン インタビュー＆
関連論考７篇収録
「ルート181」注目シーン カラー８頁



●映画解説●年表●ブックガイド
●地図：パレスチナ住民が追い出された町・村

前夜　発行／影書房　発売
A5判／112頁カラー８頁
定価1,200円＋税

ルート181 パレスチナ～イスラエル　旅の断章

東京特別上映会＆公開シンポジウム

●NPO 前夜＋東京日仏学院共催●

ミシェル・クレイフィ／エイアル・シヴァン
清末愛砂／鄭栄桓／菊池恵介

10月15日、東京日仏学院での上映会終了後、板垣雄三さんからの問題提起に続いて、監督お二人を招いての公開シンポジウムを開催した。

●はじめに●

われわれの内にある植民地主義を考える

板垣雄三
ITAGAKI Yuzo

1931年東京生まれ。
中東・イスラーム研究、
パレスチナ問題。

私は、ながらく中東、ことにパレスチナ問題、そして、現代世界の中のイスラームについて、研究をしてまいりました。そういう立場にあると、問題の性質上、その場所や事柄の内側から発信されるまさにそのために、無視されたり隠されたりする信号やメッセージを、解読・翻訳・解説しようとする身構えが、自然と身についてしまいます。今夜は、それができるかどうかわかりませんけれども、お二人の監督に成り代わって、私のがわでの、私なりの受信状況・交信結果を報告させていただきたいと思います。

そうすることは、結局、日本社会はこの映画をどのように観る

ことができるか、「日本人」はこの映画からどんな問題を引き出せるか、について述べてみることにもなるでしょう。

三点お話したいことのうち、まず第一に言いたいのは、パレスチナ問題の根源への肉薄に学ぶ、ということです。

この映画は国連決議一八一に立ち戻って、その地点からイスラエルという国のあり方を深く考え直そうとする作品ですが、そこで考えてみると、日本では、イスラエルという国が国連決議に基づいて生まれたと、間違ってそう思い込んでいる人があまりにも多いことに驚きます。むしろイスラエル国家は、国連決議一八一の墓場の上に、つまり決議一八一を否定するところに、成立したということが忘れられているわけです。

これまでその国連を舞台として、「中東和平」なるものが議論され、推進されてきました。一九六七年の戦争の後始末をつけるのがその眼目で、イスラエルという国の存在を既定事実とし、イスラエルとアラブ諸国、あるいはイスラエルとパレスチナ人との間にある問題を「紛争」と粉飾してその決着、手打ち式としての「和平」を演出しようという目論見です。

しかし、おそらく、パレスチナ人のこれまでの、またこれからの苦闘は、国連が犯した（パレスチナ住民の自決権を踏みにじる）錯誤の決議一八一すら乗り越えて出現するにいたったイスラエル国家や、国際社会が押し付けてきた（欧米の反ユダヤ主義＝シオニズムを下敷きとする）「中東和平」という議論の枠組み、これらをすべて、溶解させていくのではないか。そしてまったく新しい、これまで誰も考えなかったような新しいパレスチナのあり方を切り拓いていくだろう。またそうならなければ、人類の重荷であるパレスチナ問題の「解」はない。私はそのように見通しています。その意味で、この映画が、イスラエル国家という枠組のファブリケーション（製作）の原風景をその結末としての現在と重ね合わせて眺め直す視角を設定したのは、新パレスチナ創出をめざす闘いの出発点とも言えるのではないか、と思うのです。もはや動かしえない、あるいは動かすべきでないとされてきた「現実」が、すでに到るところで、じつに多様な姿で、溶解しはじめてしまっている事実の記録を、私たちは見てしまいました。

つぎに、第二に私が思いますのは、「言説の争い」をたゆみなく、しぶとく続けていく根気への驚きを、私たちは異文化の珍しさとしてでなく、どのように私たち自身の内側でそれを主体化できるだろうか、という疑問です。

この映画を観る日本人の多くは、行きずりの相手を厳しく問い詰める両監督とそれに応答するイスラエル市民との間のやりとりを不思議がるのではないでしょうか。理屈に対して別の理屈で対抗しようとするとき、屁理屈のほころびどころか、自分の主張をひっくり返す本音がぽろっと出たりする。

昨日（十月十四日）、東京経済大学での上映後の質疑応答で、シヴァンさんが「幾通りも異なる意見が対立する、そんな議論の白熱など、みんな平気なんだ」ということを言われました。また、クレイフィさんは、「それはむしろ精神分析の手法で、いろんな問いを突きつけることによって、心にわだかまりを持つ人たちに、吐き出した本心を自覚させるという効果もあるんだ」と、教育的ないし治癒的な立場について語ってもいました。

日本の社会で、もし同様の仕方で相手を問い詰めれば、間違いなく議論は打ち切りになる。理屈ではどうにも勝てなくなったとき、自分たちが生き残るためには他にしようがないんだと開き直ってでも議論を続けようとする代わり、日本では話もせず、摑み合い、殴り合いになるでしょう。パレスチナ人だけでなく、イスラエルの人々も、やはり言説の人たち、議論を好む人たちだということから、欧米諸国の行動様式と同じく暴力と軍国主義に流れやすい日本人としては学ぶ必要があるのではないか。二人の監督は理詰めで問題を考えていくことへの協力に、人々を巻き込もうとする。暴虐の悪の現実に対してその悪に染まるまい、絶対に悪と同じやり方では対抗するまい、という根気というよりは勇気に支えられた闘い方、その崇高な精神を、この映画は訴えているのではないか、と感じます。それは「中東和平」などというごまかしの政治的「和解」を拒否するものです。

第三に、そして最後に、私が指摘したいのは、日本社会のあり方をえぐり出すことと無関係にこの映画を観ることはできない、という自己責任の意識を触発する衝撃についてです。

イスラエルを生み出した植民地主義、そしてイスラエルそれ自体の植民地主義が、この映画を通じて鋭く問い直されるのですが、これを日本で観る、日本で問題を受け止める、とはどういうことか。日本社会の歴史および現在という文脈と切り離してこれを観ることができない事情が、期せずして掘り起こされるのです。朝鮮半島や中国、東南アジアや太平洋で日本国家が実行した植民地主義、侵略の実態とつながりあう現実をそこに見出すことになるのは、言うまでもありません。日本国家が内外に暴力的につくり出してきたディアスポラ（離散）の分断＝統合の現実も、重要な共通局面です。

だが、それと同時に、イスラエル国家の現実に目を向ければ、日本社会の「多数派」が何の不思議もなく日常感覚の中に「日本」として受け入れてしまっている「北海道」・「沖縄」という地域の問題、またそこでの先住民族の問題をどう考えるかという課題に直面させられるのです。

明治維新の直後に、それまで蝦夷地（えぞち）と呼ばれた土地が北海道と命名され、開拓使という名の行政機関が設置されました（のち、北海道庁）。しかし、蝦夷地にしても北海道にしても、アイヌの人々の世界＝アイヌモシリを征服してつくり変える植民地主義の制圧の場だったのです。北海道は「開拓」（拓殖）の対象にされ、「旧土人保護法」はなんと一九九七年まで生き続けました。先住民の言語による地名はイスラエルの場合と同様、植民者はそれを抹消しきれない格好で受け継ぎながら、変更を加えてきたのでした。先住民にとって神聖な場所や軍事的な要地は、神社仏閣の建設のために乗っ取られました。内国植民地であることを忘れる装置として「北海道」を日本国化し、「単一民族」日本の「均質性」を吹聴したりするのです。こうして、「北方領土を返せ」があたりまえの国民的要求であるかのように思ってしまったりする。オホーツク海からシベリアに拡がる世界をもつアイヌやニヴヒやウイルタなど先住の北方諸民族の目からすれば、このよ

うな思い込みは驚くべきことでしょう。

琉球についても、同様のことが言えるでしょう。そもそも、日本国家が東北の蝦夷（えみし）を俘囚、化外の民として服属させる政策のもとで「武士団」が形成され、鎌倉幕府が成立し、関東の東夷成敗や鎮西の九州成敗が「むくりこくり（蒙古・高句麗）」敵視の異国発向、秀吉の「唐入り」朝鮮征伐、島津の琉球侵略、松前藩の蝦夷地管理に連なって、明治の琉球処分、台湾出兵、征韓論、朝鮮への軍事干渉、「韓国併合」、やがて対華二十一ヵ条要求、……と展開する軍国主義の淵源となったのでした。

このように根深い侵略と植民地主義の歴史伝統を十分に自覚しないことの上に、われわれの「北海道」・「沖縄」感覚が成り立っているわけです。そんなわれわれは、今、第三者的な外在的気楽さでイスラエルの植民地主義を批判できるのだろうか？　いったいわれわれは日本の内側にある日本社会それ自体の「パレスチナ問題」をほおかぶりして、パレスチナ問題をあれこれ論評できるのか？　われわれの内にある植民地主義の自己批判という問題を考え直さなければならないことを、この映画はわれわれに強く再確認させるのです。

両監督がなしとげた仕事に具わる普遍的メッセージは、世界中でさまざまな見方と課題意識とを触発するでしょう。私なりの認識の一端を紹介させていただきました。

＊　＊　＊　＊

シンポジウム

菊池　それではシンポジウムを始めます。今日は季刊『前夜』の若手執筆者三人のコメントに対して、シヴァンさんとクレイフィさんに答えていただくという手順で対話を進めさせていただきます。

パレスチナではいまも分離壁の建設が進んでいますが、ここに示される占領者の暴力性は、単にイスラエル国家に固有のものではなくて、多かれ少なかれ、すべての近代国民国家が領土内のマイノリティに行使している排他性の露骨な現れなのではないかと思います。そこで日本という国民国家の住民としてこの映画をどのように観るのか。今日はこの点についてすこし議論ができればと思います。

まず、ジェンダー法学を専攻している清末愛砂さんからお願いします。清末さんは、パレスチナの非暴力直接行動による抵抗運動「国際連帯運動」創始者の一人であるガッサン・アンドーニさんのロング・インタビューを『前夜』二号に掲載しています。

菊池恵介　KIKUCHI Keisuke
1968年生まれ。
哲学、社会思想史。

◆原点にさかのぼる

清末　私は、ヨルダンに住むパレスチナ難民、とくに女性の難民の一世や二世から、どのように故郷を追放されたのかということをオーラル・ヒストリーという手段を用いて、聞き取り調査をしています。質問の前に、私の問題意識を説明したいと思います。

この映画を観たときに、非常に印象深かったものは、シオニストたちの居直りとそのパワーです。その居直りになんともいえない不条理さを感じ、突然追放された民、離散した民は、離散先でどのような生活をしているのだろうかということを頭の中に描きながら観ていました。前夜別冊『ルート181』（以下、前夜別冊）で、アブ・シューシャ村という虐殺があった村のことを書きましたが、実際、その虐殺をなんとか逃れてヨルダンの難民キャンプの中に住んでいる一世の難民たちの娘、すなわち二世の女性に会ったこともあります。ですから、これらの追放された民に思いを馳せずには、この映画を観ることはできませんでした。

私は、季刊『前夜』七号に掲載する、ナディヤ・シャムルーフさんというパレスチナ難民二世の女性にインタビューをするために、ヨルダンのアンマンへ行き、実は昨日（十月十四日）、日本に戻ってきたばかりです。ナディヤさんも難民二世で、ヨルダン女性連合（Jordanian Women's Union）という非常にラディカルに活動をしているフェミニスト団体の副代表をなさっています。なぜ彼女にインタビューをしようと思ったのかというと、彼女がフェミニストとして、自分がいかにヨルダンという社会で、あるいは、自分が育った難民キャンプや伝統的な家族の中でさまざまな差別を受けてきたのかということを確信的に語る、私が今まで出会ってきたパレスチナ人の中では希有な女性だったからです。彼女は、「私自身は、女性として、そして難民として非常に大きな苦しみを味わってきた。だからこそ私はずっと闘ってきたんだ」と強く主張します。

身体全身から強烈なパワーを発する彼女に、今年七月末に出会ってから、いろいろ話をするうちに、どうしても聞いてみたい問いが出てきました。それは非常に短いフレーズからなる質問で、「ナディヤさんにとって難民であるということは、どんなことを意味しているのか」というものです。彼女は、今回のインタビューではなく、別の機会で発した私のその問いに対して、「難民であることは、すべてを失い、常に移動を強いられ、自分の場所に居られないことなんだ。自分たちは自分たちとして生きてこなかった」と述べ、同時に「自分のアイデンティティの形成に、故郷はとても関係している」と答えました。それはどういうことなのかとさらに尋ねると、彼女にとって、故郷への帰還は何があっても譲ることができないものであるけれども、それは物理的な土地の問題を指すだけでなく、故郷というものが自分のアイデンティティを形成するうえで精神的に非常に大きな関わりをもつものなのだ、と説明してくれました。故郷を奪還しようと考えることで自分のアイデンティティを形成してきた、だからこそ十一歳でパレスチナ解放闘争のフィダーイーヤ（女性兵士。「捧げられし者」という意味をもつフィダーイの女性形）となるべくトレーニングに参加したという、非常に特殊な経験を有しています。

彼女にとっての故郷への帰還、すなわち絶対的に譲ることができない帰還権の問題は、失われた故郷に戻ることで自らのアイデンティティを回復することを意味しているのだ、ということが見えてきました。彼女の両親はヘブロンのザカリア村出身で、そこを追い出された後、ベツレヘム近郊にあるディヘイシャ難民キャ

ンプに来ました。その難民キャンプで彼女は生まれました。その後、一九六七年の第三次中東戦争のときにヨルダン川を越えて東岸の方へ行き、アンマンにあるナセル難民キャンプ（現プリンス・ハッサン難民キャンプ）で彼女は育ったのです。難民として生まれた彼女は、たった一度だけ故郷のザカリア村を見たことがあるそうです。それ以外は、誰かから聞いた情報をもとにして、自分の心の中で形成していくしかない故郷をなんとかして奪還するというのが、彼女の絶対的に変わることのない意志なのです。

そんな彼女から「なんでそんなに急いで日本に帰るんだ」と言われて、「実は『ルート181』のイベントがあって、クレイフィさんやシヴァンさんに会う」と話をしたら、「私たちのヨルダン女性連合も『三つの宝石の物語』というクレイフィさんの映画を上映したことがある」と言って、たいへん喜んでいました。

さて、この映画を撮り始めたのは二〇〇二年からということですが、その時期は、まさしくパレスチナ暫定自治区に対するイスラエル軍の攻撃が激化していた頃で、暫定自治区の主要都市がほぼ完全封鎖されているような状態で撮影に入ったというわけですね。一方、イスラエル国内ではさらなる右傾化が進み、ニュー・ヒストリアンと呼ばれる人たちの中から、たくさん転向者が出てくるという非常に厳しい状況におかれていたときに、なぜシオニズムという人種差別思想とパレスチナ人の追放という暴力で成り立っている国家神話を問いなおすような映画を撮りはじめたのでしょうか。なぜ、一九四七年の国連決議を問うような、すなわち問題の原点に戻ろうとしたのでしょうか。

清末愛砂　KIYOSUE Aisa
1972年生まれ。ジェンダー・女性学。

私自身はこの映画を観たときに、ユダヤ系イスラエル人たちの「居直り」に、非常に強い怒りを感じましたが、一方で、単にイスラエルが酷いのではなく、私たち自身の足元、すなわち日本社会にある植民地主義の問題を見ずにして、この映画を観ることはできないとも感じました。その辺は時間があれば議論したいと思います。

シヴァン　（日本語で）ありがとうございます。まずこのシンポジウムを企画した雑誌『前夜』のみなさんに改めてお礼を申し上げます。あまり時間もありませんから、「なぜ二〇〇二年か」という本題にすぐ入りたいと思います。ミシェルとは一九九〇年から知り合いですが、「この緊急事態に対して自分たちに何ができるか」、とたがいに自問する中でこの企画が生まれました。あなたが質問の中で言った通り、二〇〇二年といえば、イスラエル軍がジェニンに侵攻し、激しい軍事行動を繰り広げ、難民キャンプが破壊された年です。自爆攻撃が相次ぎ、これに対して封鎖、分離壁の建設などのさまざまな決定がなされました。「なぜこのような状況にいたったのか。なぜこの土地にこのような悲劇的なことが起こったのか」。これが私たちの問いでした。

そこで原点の一九四七年まで遡ってみることにしたのです。一九四七年とは、パレスチナの分割が決定された年です。しかしご存知の通り、国連憲章ではある民族の土地を他の民族に与えることを禁止しています。ですから、この分割案そのものが国連憲章に違反していたのです。しかも、このとき「共有（partage）」という言葉が使われましたが、現実には「共有」ではなく、「分割（partition）」だったのです。パレスチナの少数派であったユダヤ人に領土の大部分が与えられ、もともと住んでいた多数派の人々、つまりパレスチナ人が追放されたのです。この国連決議によるパレスチナ分割は、今日にまでおよぶ中東紛争の出発点となりました。

エイアル・シヴァン

こうしてシオニストによる大掛かりな民族浄化作戦が繰り広げられた結果、多くのパレスチナ人が難民となりました。「分離論」、「国内国境論」など、その後のイスラエルの占領政策の基調となる主張が登場してきたのも、この年でした。じつに一九四七年以来、あらゆる決議、草案、「進歩的」と言われる左翼シオニストの提案にいたるまで、すべてが「分割」を主張してきました。つまり土地を「分断」するということです。二〇〇二年に私たちはこのような歴史を踏まえて出発しました。それは記憶をたどると同時に歴史をたどる旅でした。この年でした。この紛争がどのようにして生まれたのか、その原点にさかのぼる旅だったのです。

クレイフィ　皆さん、こんにちは。大勢来て下さってありがとうございます。エイアルが指摘したように、情勢は緊迫していましたから、出発前にずいぶん議論を重ねました。パレスチナ問題はとても複雑な問題だといわれていますが、シンプルに見ることも可能です。つまり植民地主義のもとで、支配者と被支配者がいるということなのです。単純化して言えば、西欧の帝国主義諸国からなる国連は、一九四七年に、ある少数派組織、いわば一つのセクトに自分たちの都合でパレスチナの大半の領土を与えた。これが根源的な事実です。これは映画に登場する人々の証言からも明らかになります。

一九六七年以降、パレスチナにおけるイスラエル国家の存在は、いよいよ動かしがたい既成事実となりました。そして、ここからすべてが混乱してきました。もともとパレスチナに住んでいたわたしたちが「マイノリティ」として論じられるようになったのも、このころからです。つまり、パレスチナ人が占領されているという、このシンプルな事実が認識されなくなったのです。私の言おうとしていることは、イスラエルの人々、イスラエル人と言ってもいいですが、彼らの存在を否定することではありません。ただ私たちは真実に向かおうと、何が起きたのかを明らかにしようと思いました。未来のためには過去の真実を直視することが重要だからです。今日のあらゆる社会で言えることだと思いますが、偽りの上に未来を築くことはできません。たとえそれがどんなに厳しいものであっても、真実に向かわなくてはなりません。たとえば、西洋諸国と同様に、日本もまた植民地帝国だっ

ミシェル・クレイフィ

た。この歴史的事実を認めることは恥ではありません。それは皆さんの解放につながるのです。家族の秘密と同じように、自身を解き放つ契機となりえるのです。他者と正面から向き合ってみようとすることで、みずからの閉じた殻から抜け出すことができるのです。

撮影をしていて重要な発見がありました。パレスチナの状況は困難なものではあっても、ある一方の記憶は他方の記憶と対立するものではないということです。被害者に加害者の記憶を押し付けることはできないし、その逆も不可能です。たとえ両者の間に乖離があっても、われわれの「集合的記憶」または「共通の記憶」を紡ぎだす努力が必要です。日本においてもそうだと思いますが、この複雑な状況の奥底にはトラウマがあるのだ、と私たちは実感しました。しかし、一方のトラウマは他方のトラウマと対立しません。せめぎあうトラウマを対話を通じて解きほぐしていく必要があるのです。外交的、政治的やりとりだけで、どうして本当の対話が成り立つでしょうか。恐れと苦悶を超えて両者の間に真の対話を創造しなければなりません。

いまパレスチナでは、国連決議や国際人道法を侵害する行為が堂々と行なわれています。しかし、イスラエル国家は国際法を無視してもまったく裁かれることはありません。世界のあらゆるナショナリズムが陥ることですが、いまのイスラエルは歴史の外部に、人類共同体の外に踏み外してしまっています。両者の対話のためには、まずイスラエル人がその事実を認めなければなりません。もちろん、彼らがこの事実を認めなければならないと言っても、私たちにはそれを彼らに迫るいかなる力もありません。私たちはあまりにも無力なのです。ですから、これは「戦争」などではないんですね。だいたい武力による解決など私は信じていません。ただ「弱者の味方の戦士」という詩的表現としてなら、戦争のイメージを受け入れたいと思います。

◆シオニズムとレイシズムの関係

菊池　つづいて鄭栄桓（チョンヨンファン）さんです。鄭栄桓さんは在日朝鮮人運動史を研究されています。『ルート181』に関して、「占領者たちの弁明」という一文を前夜別冊と前夜ニュースレターに寄せておられます。

鄭　私のポジションは植民地化された朝鮮から渡ってきた祖父を持ち、宗主国日本にその後も留まることになった朝鮮人の一人というものです。そうした人間が『ルート181』という映画を観たとき、どういった感想をもったのか、感じ取れた普遍性がどういうものなのか。そこから述べたいと思います。

個々の場面のレベルでもっとも私の印象に残っているのは、「中部」の冒頭シーンです。ロッドという町の議会でのやり取りは私の背筋を凍りつかせました。あのシーンでただひとりアラブ人の男性が、九割がたがユダヤ人である議会で非常に困難な闘いを強いられる。その中で最後に、おそらく議長と思われる人物が「双方とも感情的になるのはよしなさい」という形でその議論を調停する、そういった場面です。なぜあのシーンに背筋の凍る思いがしたのか。ああいう光景はこの映画で初めて観たものではないんですね。一人の朝鮮人としてこの日本で生きていく中で、私自身、そして他の批判的であろうとする朝鮮人たちが日常的に経験している場面なんです。あのシーンは、占領者と被占領者たちがその関係性をまったく問うことなしに共生しようとする場合にいったい何が起こるか、それを端的に表しています。地理的には中東で起こっているわけで、距離があります。しかし、私の日常の延長のように思えたのです。そうした点に、私はひとつの普遍性を感じました。

ここ東アジアにおいて、日本という国家は半世紀以上の間、占領者として君臨してきたわけです。そして、私のような、その後も宗主国に留まることになった朝鮮人からすれば、今もなお、日本人は占領者です。しかし、占領者たちはみな、自分が占領者であるという非常に単純な事実を認めることができないのです。占領者としての自画像を目の前に突き付けられると、右翼であろうが左翼であろうが信条の如何を問わず、その人びとは猛然と弁明を始める。多くの人が、私は君たちの境遇をわかっているし、君たちの味方である、という弁明を始めます。私が『ルート181』を紹介した文章（前夜ニュースレター1号）に「占領者たちの弁明」というタイトルを付けたのは、私のそういった感覚、直感からなんです。

そこで、私が監督のお二人に聞きたいのは、次の二点です。第一は、シオニズムと人種主義、レイシズムの問題について。これはシヴァン監督にぜひ伺いたい。この映画は非常にさまざまな問題を提起していると思いますが、その一つはシオニズムとレイシズムの関係だと思います。前夜別冊をもっている方はカラー口絵を見ていただきたいのですが、八ページ下段にチュニジアから移住した女性の写真が載っています。彼女はこう言っています。「確かにイスラエルは素晴らしい国で、すべてそろっているけど、生の喜びがないの」。映画の第三部「北部」の最後のほうでこのシーンが出てきます。この「北部」で登場するモロッコ系のユダヤ人たちは、イスラエルにおけるユダヤ人社会の内部にある差別、あるいは階層秩序の最下層に位置する人々だと言っていいと思います。なかでも、いま紹介したチュニジア出身のユダヤ人女性の語りは、非常に印象的です。

鄭栄桓 CHONG Yong-hwan
1980年生まれ。
在日朝鮮人運動史。

あのシーンは、まさにシオニズムというものが、ユダヤ人内部におけるレイシズムを前提にしながら存在していることの証明である、と感じました。しかし、私はあの知性的なチュニジア出身のユダヤ人女性の語りに、救いとか、カタルシスとか、希望と

か、そういったものを感じることはできませんでした。日本という占領者の国では、あのシーンを「やっぱり占領者の中にも良い人がいるんだ」という形で消費する可能性はあるでしょう。しかし、私が受け取ったメッセージはまったく逆です。私はむしろ、占領者と被占領者との間の決定的な亀裂、そしてイスラエルという社会の絶望的な状況を表していると思いました。もちろんユダヤ人が一丸となって、一枚岩的にパレスチナ人を差別している、抑圧しているという単純な構図でないことは理解していますが、しかし、そうしたユダヤ人内部の差別の問題が、ユダヤ人とパレスチナ人の間の占領と被占領という関係を消すことではないのもまた事実です。むしろユダヤ人内部の差別構造を梃子に占領、被占領の関係が強まっていく。これが現実であると私は思います。そして、この重層的な構造、非常に困難な構造が、まさにこの『ルート181』という映画のラストで提示されたのだと考えています。

前夜別冊にシヴァンさんのインタビューが掲載されていますが、そこに「パレスチナ人だけではなく、アジア・アフリカ地域出身のユダヤ人やアラブ系ユダヤ人も、シオニズムの被害者だと言えます。とりわけアラブ諸国出身のユダヤ人たちは、イスラエル国内において、自分たちの民族的起源やルーツを忘却するよう強いられるからです」とあります。そこで、こうしたユダヤ人内部の差別の構造と、しかし、それにも拘わらず総体として占領者であるという現実、この関係についてどうお考えになっているのか、その点をシヴァンさんに伺いたい。これが第一の質問です。

それでは、こうした構造からいかに抜け出すことができるのか。これが第二の質問です。これはクレイフィさんに伺いたい。

もうひとつ印象的なシーンで、前夜別冊の口絵八頁上段に、子どもたちがやり取りするシーンがあります。「イスラエル人だ」「パレスチナ人よ、パレスチナ人のムスリム」「アッラーを信じるイスラエル人だ」こういうやり取りです。このシーンは日本で生きる朝鮮人である私にとっては、決して他人事ではないわけですね。「あなたは何人なの?」と聞かれたときに、「朝鮮人だ」と答えると、「朝鮮語を喋れない、朝鮮に行ったこともないのに、あなたはもう日本人じゃないか」という返答がもどってきます。これは昔の話ではなくて今も私たちの周囲では存在しています。そうした状況で、この議論をしていた子どもが真に解放されるパレスチナ国家というのは、いったいどういった国家であるべきなのか。私もまたそうした解放を求めますし、目指している一人として、ぜひ伺いたい。「どういった国家であるべきなのか」という問いは、きわめて第三世界的な問いであると私は考えます。

シヴァン　的確かつ繊細な質問をしてくださってありがとうございます。あなたのような繊細な視点で、私も東アジアを見ることができたならどんなに素晴らしいだろうと思います。たしかにこのふたつのシーンは、アラブ系ユダヤ人の問題を通じてシオニズムとレイシズムの問題を浮かび上がらせている、という意味で極めて重要です。イスラエル人でもこのシーンの全容をなかなか理解できないでしょう。ご指摘いただいて本当にありがとうございます。

シオニズムと人種主義の関係は難しい問題です。「シオニズムはもともと今日見られるような隔離を目指す人種差別的なプロジェクトであったのか」、という問いがあります。一方で、ハンナ・アーレントが言うように、「重要なのは意図でも夢でも宣言でもなく事実そのものだ、だから政治は政治として判断されるのだ」、という考え方もあります。こうした視点に立つならば、「シオニズムはもとから人種差別をはらむか」と問うまでもなく、現実を見て「シオニズムは人種主義的な運動なのだ」と言っていいと思います。ただし、シオニズムは十九世紀に始まった運動で、この時代には人種差別に反対する運動はまだ存在しません。むしろ人種主義は自明の前提でさえあったんですね。人種差別が問題として、「悪」として批判的に捉えられるようになったのは、二十世紀も後半になってからのことです。ですから、少しアイロニカルな言い方をすれば、十九世紀の他の多くの運動と同じく、シオニストたちは人種主義者なのです。彼らは「隔離」という考え方を好むのです。これは重要な論点です。

さらに、別のパラダイムからみることもできます。エドワード・サイードが的確に指摘しているように、オリエンタリズムという概念から見れば、シオニズムはオリエンタリストの運動です。西欧中心主義の運動であるシオニズムは、厄介な問題をはらむ二つの集団を抱えることになります。一つは「東方ユダヤ人(Juif orientaux)」、もう一つは「アラブ系ユダヤ人」。この人たちは「文明化されるべき人々」とみなされました。でも皆さん、「オリエンタル」と「アラブ」という言い方がおかしいと思われるでしょう。シオニストのユダヤ人、つまり西欧のユダヤ人から見て、東欧のユダヤ人、つまりポーランド、ロシア、ウクライナといった国々のユダヤ人はかつて「東方系(orientaux)」と呼ばれていたのです。シオニストが書いた文書を見ると、東欧のユダヤ人に対して使われていた表現や記述が、後にアラブ系ユダヤ人に関してまったく同じように使われるようになっているのがわかります。したがって、ドイツやフランスにみられる西欧中心的なビジョンから、こうした「東方ユダヤ人」は、何か特殊な人々、普通ではない人々としてみなされるようになりました。

このシオニズムという運動は、三つの否定の上に成り立っています。一つは、ユダヤ人のディアスポラ性の否定です。歴史的にみれば、ユダヤ人は何世紀にもわたって固有の民族国家を持たずに生きてきました。しかし、いまやディアスポラであることが異常事態、例外状況だとみなされるようになりました。二つ目は、アラビア性の否定です。シオニズムは、ユダヤ思想の大きな部分を占めるアラビア的なものを否定しています。三つ目は、地理的現実の否定です。パレスチナ人がこの土地にもともと住んでいたことを否定することは、すなわちパレスチナの現実そのものの否定です。ご質問の中で、イスラエル社会内部におけるアラブ系ユダヤ人に対する差別が指摘されました。長年の間、イスラエルの学校教育では、アラブ世界にもユダヤ人がいることが教えられてこなかった。アラブ世界のユダヤ人の経験は、じつは西欧のユダヤ人の経験とはまったく違うものだったのです。ではなぜアラブ系ユダヤ人の記憶が忘却されてきたのか。これは記憶と歴史にか

かわる問題です。

あなたはチュニジア出身の女性が証言するあのラストシーンに希望を見いだすことができないと言いましたが、私はそうは思いません。なぜなら、あの場面には、過去の共存のイメージが示されていると思うからです。じつはシオニストたちの教育には、ユダヤ人でない人々との平和的な共存のモデルがありません。なぜなら彼らにとってユダヤ人は絶え間ない迫害の物語の中に生きているからです。「ユダヤ人は世界中どこでも迫害されている、だからイスラエル国家が必要だ」という物語ですね。ところが、アラブ諸国出身のユダヤ人の経験は、このような絶えざる迫害の記憶ではない。そうなると、アラブ系ユダヤ人の記憶をシオニズムのために利用することができないわけです。むしろ、これは否定し、隠蔽しなければならない記憶なのです。こうしてユダヤ-アラブ文化が犠牲になりました。たとえば、西欧や米国、ラテン・アメリカ出身のユダヤ人は、自分の母語を話し、別に恥入ることはありません。ところが、アラブ系家庭の若いユダヤ人たちは、彼らの母語であるアラビア語を話せないのです。アラブ世界におけるユダヤ人の歴史や経験を見直そうという動きが出てきたのは、つい最近のことなのです。

結論に入る前に、シオニストたちの主張の矛盾を指摘しておきたいと思います。イスラエル国家は、アラブ世界から移民してきた数百万のユダヤ人たちを「難民」だと主張してきました。「迫害の歴史と戦争のために、国境線を跨ぐ大きな人口の移動があった、だからパレスチナ難民とはお互い様なんだ」、と。しかし、その一方で、アラブ世界からの移民はユダヤ民族の「帰還運動」だと主張しているのです。「ユダヤ人には、本来パレスチナへの帰還を求める内発的な志向性がある」、と。ここに矛盾があります。追放された「難民」であるはずの人々がどうして同時にパレスチナ帰還を熱望する「シオニスト」であり得るのでしょうか。この矛盾が示しているのは、アラブ諸国出身のユダヤ人たちが政治的に利用されてきた、という歴史的事実にほかなりません。『ルート181』を観ればおわかりいただけると思いますが、アラブ諸国から移民してきたユダヤ人は、何十年にもわたって、イスラエルの周囲のアラブ諸国との緩衝地帯に追いやられてきた。彼らは西欧化された中心部、いわゆる「アシュケナージ・パワーセンター」を守る盾として最前線に配置されてきたのです。

あのラストシーンが希望を与えるものか否かという問題に戻ります。共生の可能性を思い描くとき、参照できるモデルなしにそれを実現することはできないのではないかと私は考えています。このシーンの素晴らしさは、過去に存在したひとつの共存のモデルが示されている点です。だいたい結婚している二人の人間が一緒に暮らすのだって容易なことではありませんし（笑）、共生すればいいというものでもありません。この夫婦の会話にはつぎのような場面がでてきます。「ヴィシー政権下のチュニジアにナチスがやってきて、ユダヤ人を強制連行してガス室に送ろうとしたとき……」、とモロッコ出身の夫がいいかけたとき、――このようなフレーズはイスラエル人の常套句の一つです――、これを遮るように妻は言いました。「その時ユダヤ人をかくまったのは誰か。彼らを助けたのは誰か。アラブ人だったじゃないの」、と。埋もれかけていた記憶が、不意にこのとき蘇ったのです。ここで示唆されているのは、とても重要な歴史的事実です。アラブ世界のムスリムは、西欧世界と同じようにユダヤ人を迫害したことはなかった。現在シオニストと結託している西欧諸国は、イスラエル国家とともに、このユダヤ人とアラブ人の「共通の記憶」を否認しているのです。

◆どのような国家であるべきか？

クレイフィ　どのような未来を展望しているのか。正直に言って、私にはわかりません。オスロ合意以来、いえ、最初の湾岸戦争以来、世界はマフィアに操られています。ブッシュとサダム・フセイン、あるいはブッシュ一族とフセイン一族のうち、どちらが石油資源をぶんどるか。「イラクをやるから金をよこせ」、というようなやりとりです。そしてこのような争いに世界中の人々が巻き込まれている。これはアメリカ人にもイラク人にも、そしてわれわれみんなに対する侮辱です。なぜこのような事態になってしまったのか、私には理解できません。ただ一つ言えることは、パレスチナをイスラエル化しようとするイスラエル国家の目論見は成功しない、ということです。六〇年代、七〇年代にはイスラエルに協力したアラブ人たちがいた。しかし今ではイスラム原理主義者になってイスラエル人たちに脅威を与えています。物事は急速に変わっています。だから、未来はどうかと言われても何も言えません。ただ、未来はともに鍛え作り上げていくしかないということだけです。あなたがたにとっても、日本社会なしに未来があり得ないのと同じように、日本社会もあなたがたなしに未来を築くことはできません。このように個人のアイデンティティと社会は結びついています。人間のアイデンティティは、不断に変容するプロセスだと思います。重要なのは、どのような社会を目指していたのか、その方向性を見失わないことです。

ところで、占領下のパレスチナ人の子どもたちは、生存のための闘いを強いられているため、いつの間にかアイデンティティの使い分けを覚えます。「お前たちはイスラエル人だ」と言われれば、イスラエル人になりすますし、「アラブ系イスラエル人だ」と言われれば、アラブ系イスラエル人として振舞う。これはトラブルを避けるために経験から得た知恵なのです。しかし、忘れてはならないのは、あの子たちもいわゆる「ストックホルム症候群」に陥るリスクにさらされているという点です。つまり、長い間拉致されているうちに、いつのまにか被害者が加害者にシンパシーを抱いてしまうことがある。占領下の子どもたちは、いつでもこのようなリスクと隣り合わせなのです。

菊池　私からも一点、将来の展望についてお尋ねします。シヴァンさんは『ルート181』の前にアイヒマン裁判についてのドキュメンタリー映画『スペシャリスト』を制作しています。その際、「悪の陳腐さ」という副題を持つハンナ・アーレントの作品『イェルサレムのアイヒマン』に触発されたと伺っています。『ルート181』でも、戦車に乗った読書家の兵士に向かって、「君は『悪の陳腐さ』という概念を知っているか？」と問いかけていま

す。

このハンナ・アーレントという哲学者は『全体主義の起源』という本の有名な一章、「国民国家の没落と人権の終焉」の中で、国家と人権の関係をめぐる省察を行ないました。すなわち、人間は生まれながらにして平等であり、普遍的に人権を持っているといわれるけれども、現実にはそれが理念として表明されただけでは守られない。実際、なんらかの力がそれを保障するということがなければ、いかにも脆いものである、と。十九世紀に生まれたシオニズム運動は、このようなジレンマに対するひとつの応答だと思うんですね。つまり、他の国民国家のなかでマイノリティの地位に甘んじるよりは、ユダヤ人国家を立ち上げることによって、より確かな権利の保障を得ようとする選択です。だがこうして成立したイスラエルも、国民国家の排他的原理に立脚することにより、パレスチナ難民という無権利状態の人々をつくりだしていく。ここに国民国家の暴力性が反復される構図があるように思います。

このような排他性をはらむシオニズムに対して、シヴァンさんは一貫して批判的です。さきほどは「シオニズムはレイシズムである」と明言されました。また、前夜別冊に掲載されたインタビューでは、シオニズムが否認しているものの一つとして、元来、ディアスポラとして生きてきたユダヤ人の歴史性、つまりは非領土的なあり方をしてきたユダヤ人の歴史に言及されています。ここにユダヤ人国家を創設することで権利を保障しようとするのとは別な政治秩序の可能性が示唆されているように思います。しかし近代的な国民国家が問題を孕むものだとしても、漠然と国家なしに人権保障を考えるのも困難です。そこでいかにして既存の国家のあり方を変えていくかという課題に直面せざるをえないように思います。では、シヴァンさんはシオニズムを否定する一方で、いかなる国家のあり方を構想していらっしゃるのか。この点をお尋ねしたいと思います。

◆二民族国家の構想

シヴァン　ハンナ・アーレントを議論しようと思えば、シンポジウムがいくつも必要なくらい大きな課題ですから、一問一答で私の手に負えるものではありません。ここでは、あなたが引用した「国家なくして人権は保障されない」ということについてだけ、アーレントの概念を手がかりにお話したいと思います。

まずこの問題に関して指摘しておきたい点は、たとえ国家があっても必ずしも人権は守られないという現実です。これはアーレントも予見していたことです。国家というものはその構成員の一部を排除する。アーレントは、排除された人々を「余剰人口」と呼んでいました。国家にとってこれらの人々は「重荷」なのです。アーレントの国民国家論は非常に先見的なものでした。彼女が一時期シオニストだったことはご存知でしょうか。のちに彼女は二つの素晴らしい論考を発表し、シオニズムと決別することになります。一つは戦時中の一九四二年に書かれました。彼女はギュルス（フランス）の収容所に捕らえられますが、まもなく脱出に成功します。その直後の四二年にシオニストの構想を批判するこの論考を著しました。いま一つは、四六年に書かれた「シオニズム再考」という有名な論考です。この論文でシオニズムとの決別は決定的になりました。パレスチナ人の追放なしにシオニズムの計画は実現不可能だということを悟ったアーレントは、イスラエル建国の二年前にシオニズムと決別しました。

一九四六年には、イスラエルの非宗教の大学の創立者であり、ゲルショーム・ショーレムとともに平和同盟の代表だったユダ・マグネスの要請に応えて、アーレントは国連決議案一八一号を提案することになる委員会に赴いて、二つの民族からなる国家の構想を訴えました。これはシオニストたちに完全に拒絶されました。現実のところ、この構想を支持したのは一握りの知識人だけで、それもみなドイツ系というのが興味深いところです。ゲルショーム・ショーレム、マルティン・ブーバー、ユダ・マグネス、そしてアーレントといった知識人です。この人たちが当時支持していたのは、二つの民族が対等な権利のもとに同じ国民として存在することを認める国家の構想でした。その後、アーレントは立場を変えて、六七年にはイスラエルの占領を擁護するじつに耐え難い論文も書いています。ゲルショーム・ショーレムなど、ほかの連中も同じです。

今日では、この二民族国家（État bi-national）の構想が唯一選択可能なオプションだと私は考えています。二民族国家の構想とは、イスラエル国家とパレスチナ国家という、二つの国家が並存するという考え方ではなく、また単に一つの国家内に二つの民族がいるということでもありません。それをいうならイスラエル国家は最初から二民族国家なのです。人口の二〇パーセントはイスラエルの市民権を持つパレスチナ人なのですから。しかも、彼らはもともとそこに住んでいた人々です。なのに、単なる民族的マイノリティの一つとして扱われている。これに対して、私の主張する二民族国家の構想とは、両者の権利の平等を原則とする国家のあり方です。二民族国家とは、両者の平等が保障されるような国家の理念だとも言えます。もしこれが実現すれば、法治国家としての本来の役割を国民国家も果たせるかもしれません。

また、二民族国家の構想は、「われわれユダヤ人がマジョリティである」という発想の転換を意味している。この点を最後に、一人のイスラエル市民として申し上げたいと思います。われわれイスラエル人はパレスチナ人に対して自分たちがマジョリティだという幻想のなかで暮らしてきました。しかし、中東地域ではむしろユダヤ人のほうがマイノリティなのです。したがって、私たちがここで平和的に暮らせるためには、これまでの私たちの尊大な態度を捨て去る必要があります。これは私たちの存在を受け入れてもらうための一つの方法です。私たちがパレスチナ人に何かを譲歩したり、何かを与えてやるというのではありません。もともと彼らの土地だったのです。ですから、私たちのほうが彼らに共有（partage）をお願いしなければならない。われわれが強者で弱者に向き合っているという発想とはまったく逆に。これはワルター・ベンヤミンの歴史概念とも重なるところです。

ドイツから亡命したハンナ・アーレントの手で刊行された『歴史哲学テーゼ』で、ワルター・ベンヤミンは、いわゆる支配者の

歴史叙述に対して、被抑圧者の視点からの歴史を主張しています。いわば勝者の歴史を逆撫でするように叙述されなければならない、と。しかし、この被抑圧者の歴史は、興味深いことに、抑圧者の証言なくして存立することができません。ですから、前の質問に戻りますが、加害者の言葉は被害者にとっても必要なのです。『ルート181』では、まさにパレスチナの民族浄化について、加害者の証言が出てきます。彼らは兵士として民族浄化作戦に参加したことを認め、こう言いました。「(パレスチナ)難民は突然湧いてきたわけじゃない。彼らはもともとここにいたのさ。俺たちが追い出したんだ」、と。ここには、ある意味で、加害者の証言と被害者の証言の一致がみられます。こうして、占領者の記憶と被占領者の記憶は、もはや単に並存しているのではなく、一つの真実となった。すなわち、両者の言葉からこの真実が生み出されたのです。二民族国家の構想が実現するためには、このような共通の物語が紡ぎだされなければならない。その前提条件は、イスラエルによる軍事占領の終結です。軍事占領の終わりは、ただちに紛争の終結を意味するのではない。それは対話のはじまりの第一歩なのです。

クレイフィ　いま私たちはアジアの東の果てにいて、それは素晴らしいのですが、悲しいかな、私たちはいまだに西欧の思想に囚われています。アラブ世界の言葉をもっと参照してほしいと思います。アラブ世界にも素晴らしい考え方はあるし、歴史を通じていつの時代にも、精神世界や国家、反植民地主義の闘いに関する思想がありました。時々、私たちパレスチナ人は知的論争の小さな問題、あるいはユダヤ人世界の内部の問題として片付けられているような気がするときがあります。私たちの言葉には意味がないかのように。私たちにも言葉が、生きてきた経験が、思想が、そして日々の闘いがあります。パレスチナ人のような小さな民族が大国に翻弄されて、自分たちのものではない歴史の代償を支払わされているということ。これらをもっと具体的な側面から考慮しなくてはいけません。

私自身はべつに自分が被害者だとは感じていませんし、こうした論争の的になることを格別嬉しいとも思いません。ただ、こうした知的論争の試練を通じて、パレスチナ人たちの正しさに対する私の信念がよりいっそう鍛えられると信じています。パレスチナ人たちの運命は、二百年以上もの間、帝国主義者の外交の裏舞台で勝手に決定されてきました。それは大学でも基本的に同じです。大学では、どのようにすれば人間がより豊かに生きられるかが探究されるだけではなく、どうすれば人間性を管理し、支配できるかが研究されています。これに対して、このエネルギーを他者の理解へと向けるためには何をなすべきか、ともに考えてほしいのです。

先日、ニューデリーの映画祭で出会ったインドの人たちにこう質問されました。「どうしたらヨーロッパで自分の映画を上映できるだろうか。」そこで私はこう答えました。「インドには何百万もの観客がいるのに、いったいヨーロッパ人から何が欲しいというのですか。なぜヨーロッパ人が必要なのですか。逆に〈ぜひあなたの映画を上映させてくれ〉と彼らに言わせなければいけません。あなた方は偉大なのだから！」

この話をしたのは、西欧中心主義からの発想の転換をうながすためです。客観性は何もヨーロッパだけの、占領者だけの視点ではありません。被占領者の言葉も大切なのです。

◆質問に応えて

●パリで上映中止事件があったと聞いています。この映画自体があるユダヤ人たちには強い拒否感をもって受けとられると思いますが、その辺のところで印象に残ることがあったら教えてください。

クレイフィ　イスラエルの諜報機関がパリのシオニストと仕組んだ例の攻撃のことでしょうか(笑)。あまり深い意味はないと思います。ただ、われわれを威嚇するためにやっただけでしょう。そんなものに関わっている必要はありません。映画も私たちも大いに傷つけられ、とくにエイアルは脅迫され、ひどい目にあいました。『ルート181』のボイコットを求める署名文書がある新聞に掲載されましたが、これに十二人の知識人の一人として署名したある映画監督が、のちに『ル・モンド』のインタビューのなかで、じつは映画を見ていないことを告白しています。どうしてこんな連中にまじめに取り合っていられるでしょう。映画も私たちもひどく傷つけられましたが、それでも作品は残った。ただそれだけのことです。

この事件は、ある意味で「パリの知識人」といわれる人々の退廃ぶりを示しています。フランスという国が映画を禁止するなどという愚行を犯してしまうとは、そして一部の知識人たちがこのような圧力をかけてくるとは、なんとも悲しい事態です。

シヴァン　一点だけ付け加えさせてください。まさにいまのご質問の中に罠があるのだと思います。「ユダヤ人たち」という考え方、あるいは「巨大なユダヤ人ロビー」といった考え方は、「ユダヤ人共同体」という実体を立ち上げてしまうのです。これでは「われわれこそユダヤ人共同体だ」と自称する人々の思う壺なのです。「ユダヤ人共同体」とは何でしょう？　じつは何も意味しません。フランスにはユダヤ系の公的機関や文化機関がいくつか存在しています。それらはイスラエル批判を牽制しようと積極的に動いている。いわばプロパガンダ戦争を仕掛けているんですね。彼らは有能だし、獲得目標も実によく心得ています。そのことをこちらが嘆いても仕方ありません。彼らの攻撃に対して、「われわれはやるべきことをちゃんとやったか」――反省すべき点はただそれだけです。

結局のところ、文化大臣は映画の中止には失敗しました。ポンピドゥ・センターでの上映は一回だけ中止になりましたが、この事件のせいで大臣は大変な批判を浴びました。しかも、私たちは今日こうして東京の日仏会館での上映に堂々と参加しています。ニューデリー、ブエノスアイレス、山形などの世界中の映画祭で、必ず質問されます――「いったいフランス文化大臣は何をしたのか？　なぜ上映禁止にしたのか？」と。だからおとなしく黙っていればよかったのです。こんな大変不名誉な宣伝をするべきではなかった。とはいえ、一般公開の際には、フランス中でわ

ずか三つの映画館しか私たちの作品を上映してくれませんでした。どこも脅迫や嫌がらせを恐れていました。でもそれだけです。しかし、「ユダヤ人たちがあれをやった、これをやった」という発想は、逆にありもしない現実を作りだしてしまう危険があるので、やはり注意したほうがよいでしょう。

●一本の映画を二人の監督が撮るのは非常に難しいことだと想像します。もし今回の映画制作の過程で何か意見が合わなくて、長い議論を要するようなことがありましたら教えてください。

シヴァン　共同監督した作品はそれほど多くはないです。最初のコラボレーションは『スペシャリスト』という作品でロニー・ブラウマンと脚本を共同執筆しました。『ルート181』の撮影は、いわば旅のようなもので、二人の間で仕事の分担はとくにしませんでした。映画を観ていればわかると思いますが、パレスチナ人だからこう見る、とかイスラエル人だからこう見る、というやり方はしていません。もちろん時にはここはミシェルがやったほうがいい、ここは私がやったほうがいい、ということはありました。たとえばミシェルがイスラエル兵とケンカなんかしていたら、今ごろここにいられません。私も刑務所にオレンジでも届けにいっているでしょう。

一緒に旅をして、意見を交換したりしていました。ある時ミシェルがダウンして私が代わりに取材したこともありました。編集室では議論が仕事ですから、ずっと一緒でした。撮影前に時間をかけて準備したというより、撮影しながら材料を見つけていったという具合でした。そこから一年とすこし、この冒険は続いたわけですが、編集、仕上げ、撮影、いつでも二人で絶えず議論していました。

私たちを導き、力を与えてくれたことが一つあります。はじめにお互いに「とにかく最後までやろう」と言い合ったことです。途中でやめるという特権を自らに与えないようにしようと。そうでなければ安易すぎるだろうから、と。

ずいぶん前ですがミシェルがとてもいいことを言っていました。政治家にもできないことをやったな、と。彼らのほうが権力を持っているのに、交渉が行き詰まると政治家は家に帰ってしまう。投げ出してしまうのです。でも、われわれはそれを許さない、「最後までやろう」と。これはお互いに誓った約束だったのです。

菊池　時間になりましたので、私から印象に残った論点を二つほど整理して終わりたいと思います。一般にイスラエル＝パレスチナ紛争は、とても複雑な問題だと言われているけれども、ものごとをシンプルに見据えることが重要なのだという指摘が、冒頭でクレイフィさんからありました。イスラエルという国は、当時の西欧帝国主義国の都合で、いわば植民地国家としてパレスチナに建設され、その結果、多くのパレスチナ先住民が追放されるという不正があった。この事実を占領者が直視しないかぎり、真の和平はありえない、というお話でした。なぜなら、偽りの上に未来を築くことはできないからですね。また過去の真実を直視することは恥かしいことではない、むしろ加害者自身の解放にも繋がるのだという指摘がありました。これは、戦後半世紀以上の歳月を経ても過去の植民地支配を直視できず、東アジアの共通の未来も展望できない日本人にとって、重要な指摘だと思います。

また、シヴァンさんからは、来るべき国家のあり方について示唆的な話がありました。いわゆる国民国家論に対する関心は、近年日本のアカデミズムでも高まりをみせ、九〇年代には、「単一民族神話」論や「想像の共同体」論などがさかんに論じられました。しかし「ナショナリズムを超える」とは具体的にどういうことかは、しばしば曖昧なままです。あたかも国民国家の虚構性を指摘することが、問題の克服であるかのように。これに対して、イスラエル＝パレスチナ紛争に即してシヴァンさんが指摘された二民族国家の構想は、ひとつの具体的な手がかりを与えてくれるように思います。二民族国家の構想とは、パレスチナに居住するすべての地域住民に対して対等な権利を保障する体制をつくることであり、そのためにはまずマジョリティの側の根本的な意識変革が求められる、という発言でした。つまり、ナショナリズムの偏狭性を克服するためには、単にこれを観念的に否定するだけではなく、国籍条項などに象徴される、さまざまな制度的差別を撤廃していく必要があるということですね。これも日本の主権者として私たちが重く受け止めなければならない指摘だと思います。なぜなら、このような差別構造が温存されているかぎり、私たちもまた「占領者」であり続けるからです。この意味で、『ルート181』で映し出される光景は決して他人事ではありえない。それは私たち自身に問われている課題を示唆しているのではないかと思います。

最後に、山形映画祭から駆けつけてくれたクレイフィさんとシヴァンさんに、もう一度お礼を申し上げたいと思います。今日は長時間ありがとうございました。

（同時通訳＝三浦信孝・野原道広、翻訳＝久保田ゆり・菊地恵介　撮影＝松山果包）

ルート181
パレスチナ～イスラエルの旅の断章

2003年／270分／カラー／DVCam
ベルギー、フランス、イギリス、ドイツ
／アラビア語、ヘブライ語

● 『ルート181』を上映するには、山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局で作品を貸し出していますのでお問い合わせください。上映会では前夜別冊、本誌6号の販売にご協力いただければ幸いです。
問合せ　同事務局 TEL023－624－8368
http://www.city.yamagata.yamagata.jp/yidff/home.html
関西では、「前夜」も参加している実行委員会の主催で、1月28日（京都）、29日（大阪）で上映会が開催されます（294頁参照）。

● 『ルート181』東京特別上映＆監督トークプロジェクトは、山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会東京事務局、東京経済大学、東京日仏学院、東京演劇アンサンブルの協力を得て実施しました。全体報告は、292頁を参照ください。